

第5回信州大学大学史資料センター企画展

# 明治・大正期 信濃博物学の夜明けと 長野県師範学校

— 矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に —

Web版



矢澤ノート (1921年)  
諏訪市博物館蔵



ライチョウ標本 (1918年5月)  
自然科学館蔵



矢澤米三郎  
諏訪市博物館蔵



挿図「タカネキンボウゲ」  
矢澤米三郎 画  
信濃博物学雑誌 第十八号 (1905年)  
附録図書館蔵

「未来へ引き継ぐもの  
ミュージアムへ」



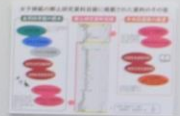
資料の活用



はじめに



はじめに

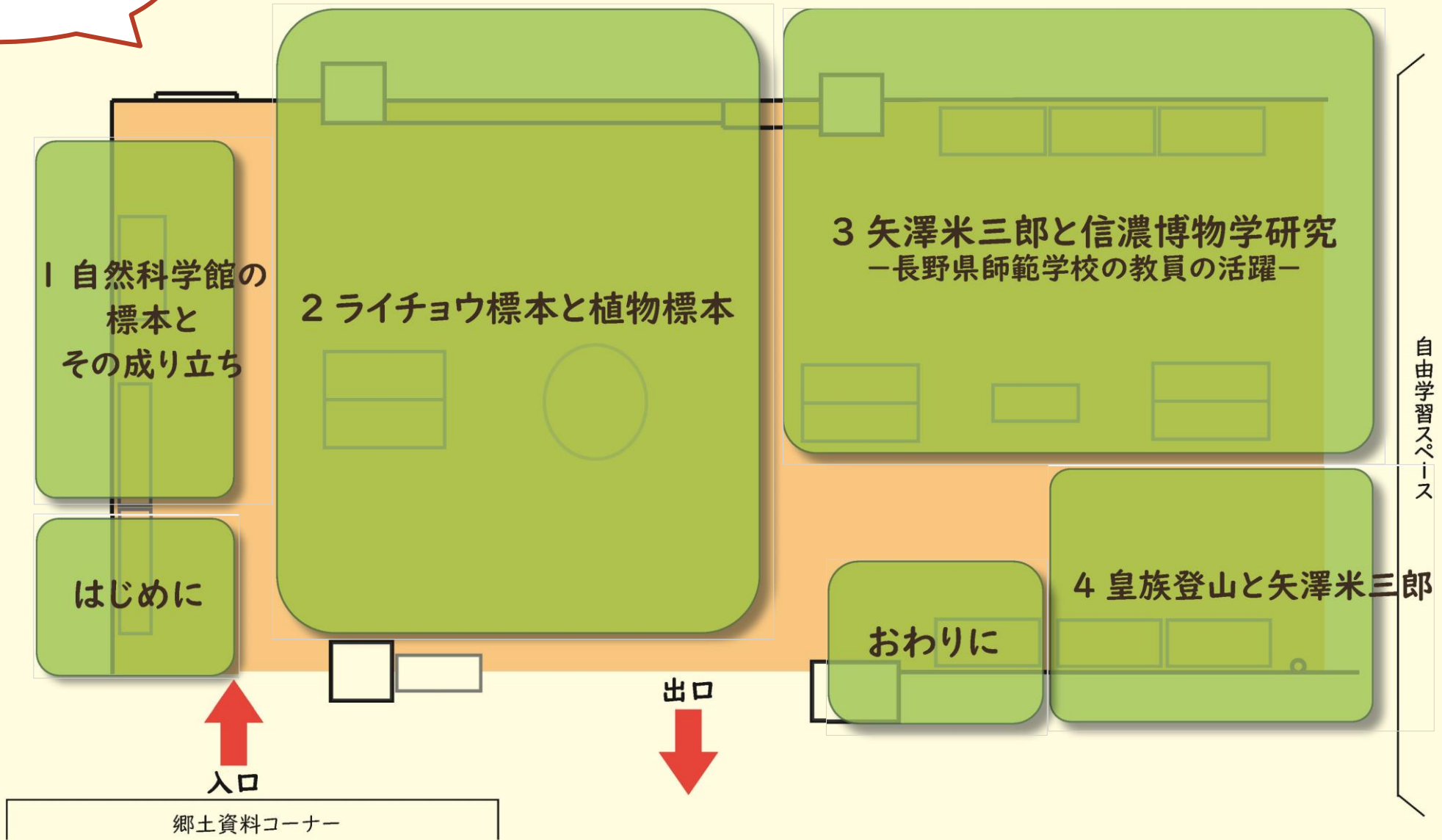


自然科学館の標本とその成り立ち

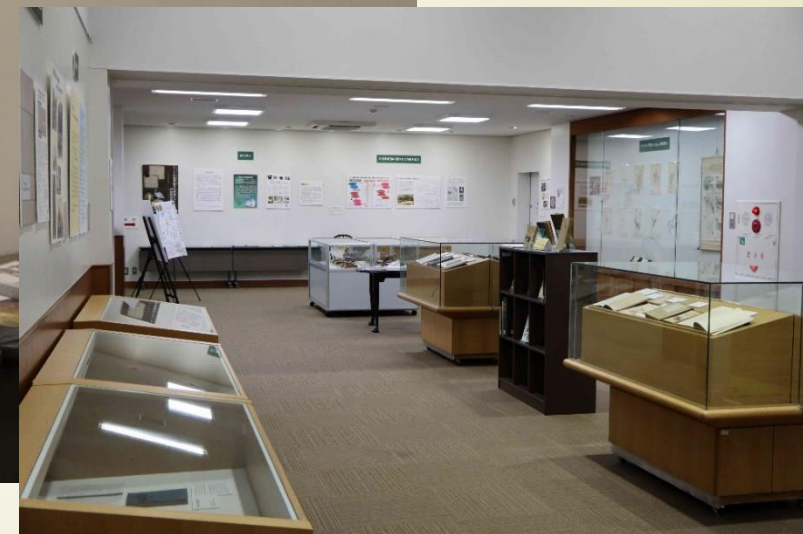


# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



はじめに



# ごあいさつ

信州大学の前身校のひとつ、長野県師範学校・長野県松本女子師範学校は、初等教育の教員養成機関として1873（明治6）年に設置された師範講習所に起源があります。

その卒業生は、県下各初等学校の教壇にたつとともに、地域の人文・自然科学の研究をも担いました。

今回の企画展では、師範学校の教員による自然科学研究の代表ともいえる長野県松本女子師範学校初代校長矢澤米三郎と彼のライチョウ研究をはじめとする博物学研究、とりわけ矢澤が長野県松本女子師範学校に寄贈し、本学自然科学館に継承されたライチョウ標本・高山植物標本をとりあげ、山岳の動植物にフィールドを求めた矢澤の研究をふりかえります。

最後になりますが、本展は諏訪市博物館から矢澤米三郎に関する貴重な資料を提供いただき、本学所蔵の標本資料と合わせた立体的な展示とすることができました。厚くお礼申し上げます。

2022年10月

# 信州大学自然科学館

信州大学自然科学館は、各キャンパスに分散している貴重資料の展示、データベース化と公開、小中高校生・市民向け体験学習事業の実施等教育研究活動への協力を行うため、2012年8月に開設されました。

加えて、図書館、関係する学部・全学教育センター等部局や学内共同教育研究施設さらには長野県ならびに周辺市町村などの地方自治体の協力を得て、環境保全、中山間地や里山の自然と文化、自然災害と防災など自然と人間生活が深く関わった文理融合分野の全学の教育研究とその情報公開にも役立てたいと考えています。

本格的な展示設備は未整備ですが、松本キャンパスでささやかな展示を行っております。

どうぞ、お気軽に足をお運び下さい。



はじめに



# 信州大学 大学史資料センター



信州大学大学史資料センターは、2019年の創立70周年を契機に、散逸が危惧される本学の歴史に関する資料の体系的な収集・整理・保存・公開・展示を担う施設として2017年に設立されました。

これまでは、大学の歴史に焦点をあてた企画展示を行ってききましたが、今後は長野県内各地の大学施設や県内の教育関連機関、地域の皆様と連携し、資料の調査を行うとともに企画展も行っていく予定です。本企画展は、連携企画展の第一歩となります。



[信州大学 大学史資料センターウェブサイト⇒](#)

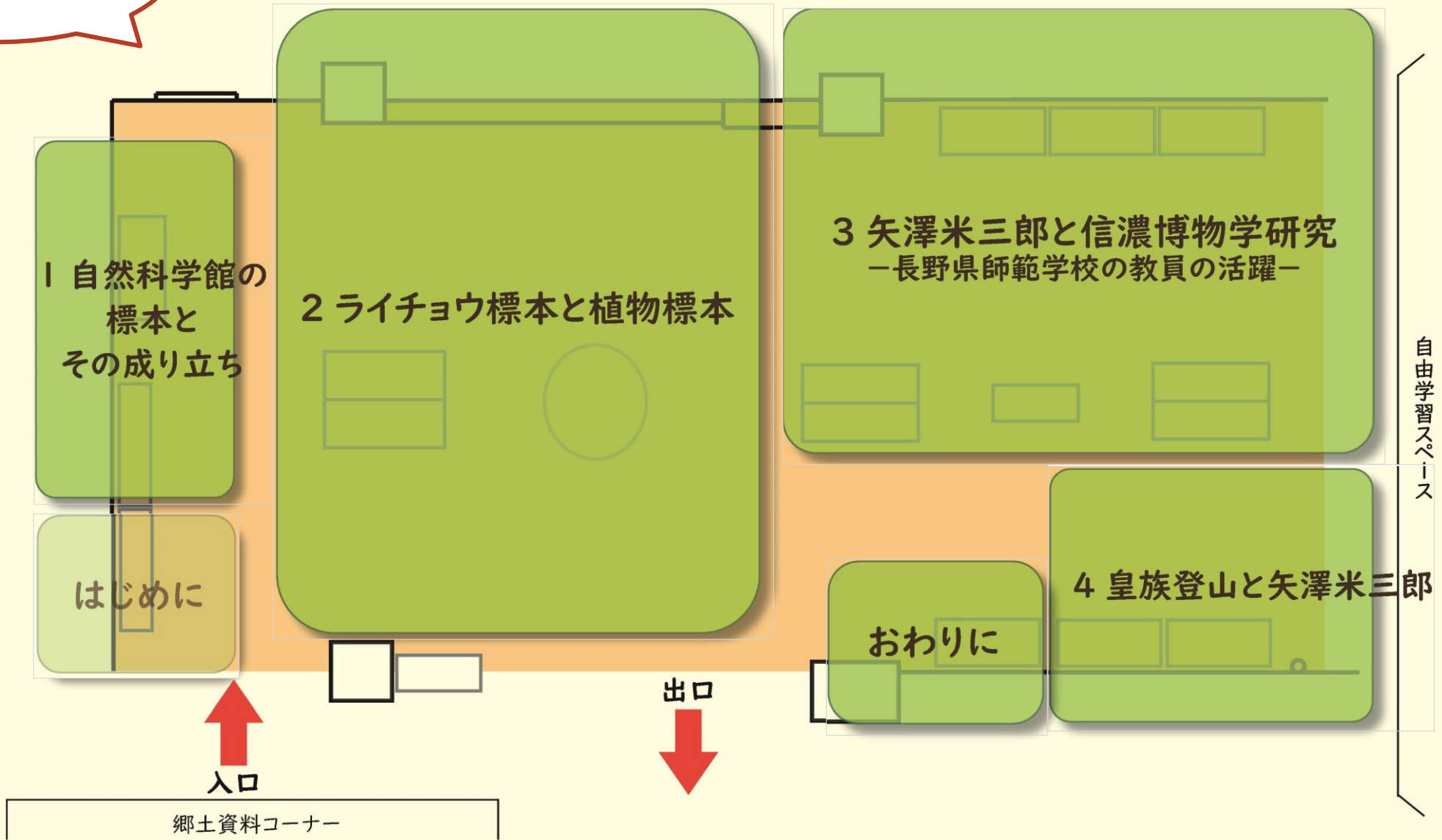
# 博物学とは

明治維新以後、それまで動植物を薬物として活用するための学問であった本草学にかわり、欧米で発達した博物学が本格的に取り入れられました。博物学は植物、動物、鉱物といった自然界に存在する物について、種類や性質などの情報を収集・記録し、さらにそれを整理・分類する学問で、教育課程における教科のひとつでもありました。明治時代末～大正時代に生物学や地学へと発展していきました。



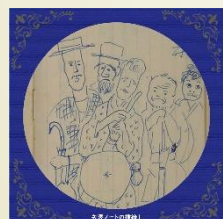
# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



# 1 自然科学館の標本とその成り立ち

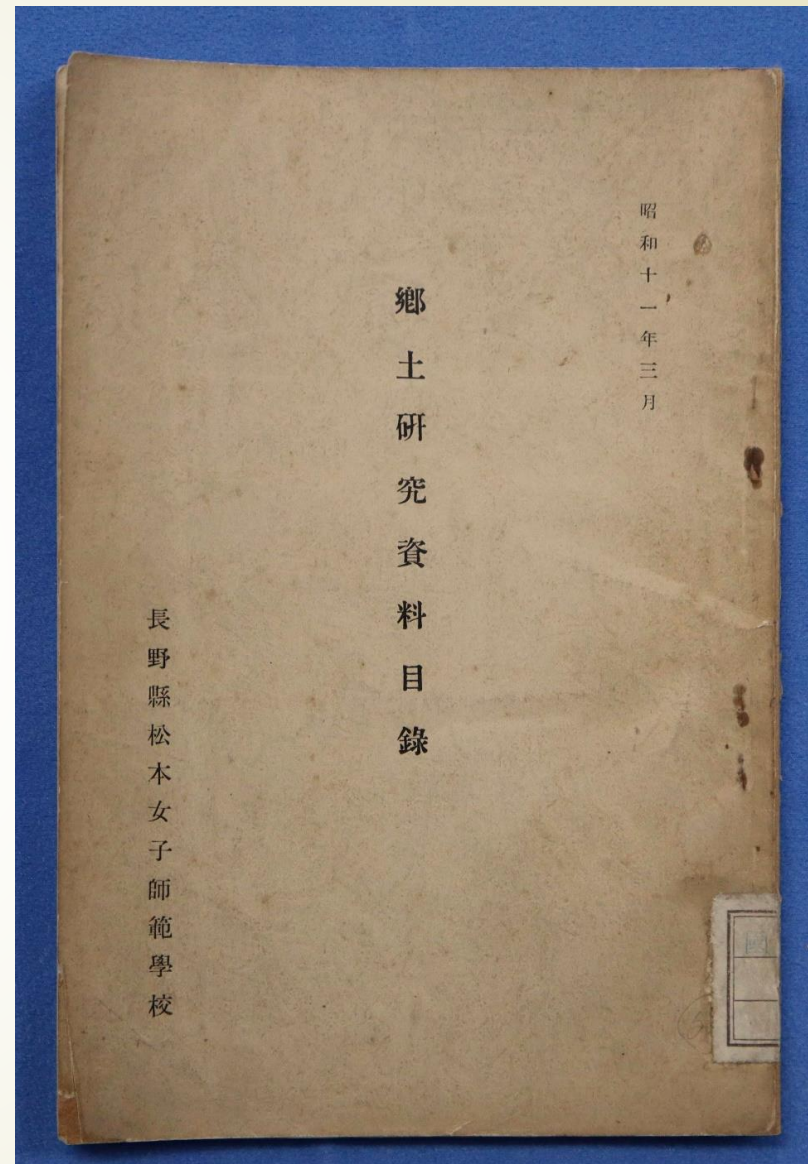
長野県松本女子師範学校（以下、松本女子師範学校）や旧制松本高等学校の標本や蔵書が自然科学館の標本類（動物、植物、鉱物、化石など）や附属図書館の蔵書に引き継がれていることは、『郷土研究資料目録』（松本女子師範学校1936年）などからわかります。



# 『郷土研究資料目録』

長野県松本女子師範学校刊  
1936(昭和11)年  
中央図書館 蔵

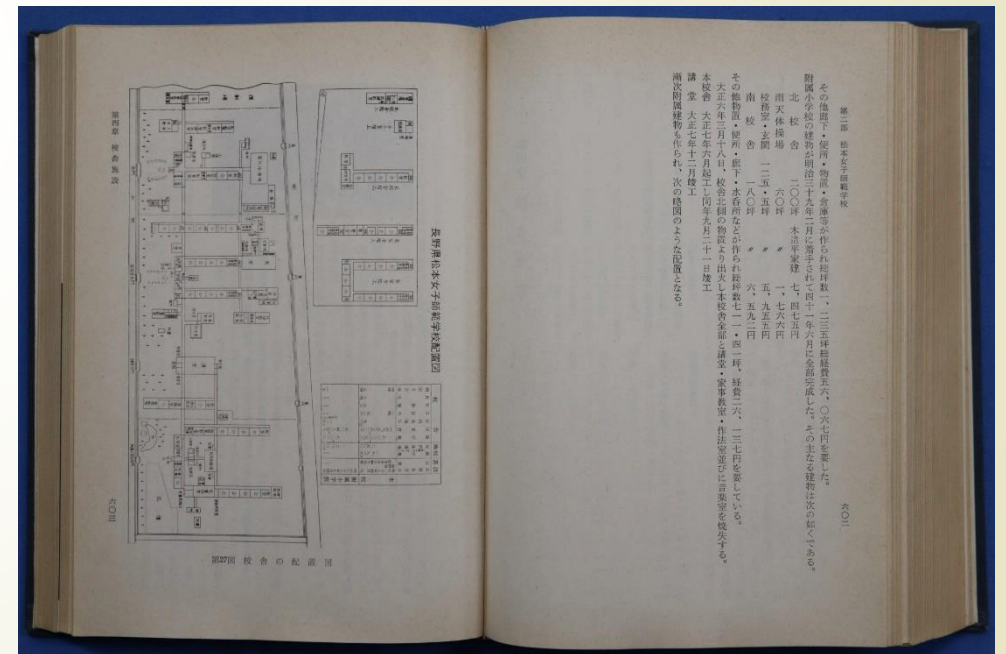
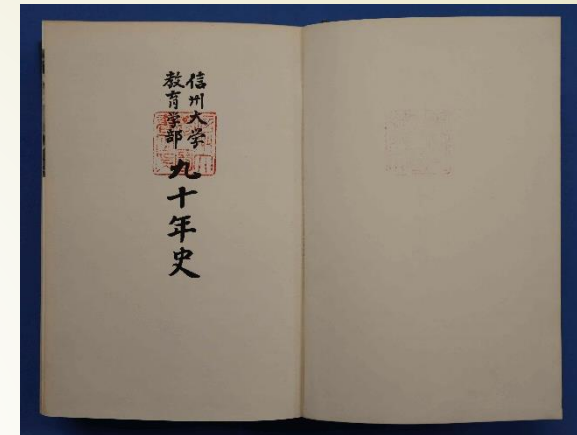
1936(昭和11)年3月に松本女子師範学校が発行した郷土研究のために整備された資料の目録。「参考書類と標本類」からなる。動物標本として「らいてう」の目録があり、雌雄・捕獲年月日が記載されていることから、同定作業により自然科学館所蔵のライチョウ標本が本目録掲載の標本であることがわかった。植物標本の目録は収録されていない。



# 『信州大学教育学部九十年史』

信州大学教育学部創立九十周年記念会  
1965(昭和40)年  
中央図書館 蔵

教育学部創立90周年を記念して1965(昭和40)年  
年に出版された。明治初期の長野県・筑摩県の各  
師範講習所からはじめ、各県師範学校、両県合併  
後の長野県師範学校、長野県尋常師範学校、長野  
県師範学校、官立長野師範学校、および松本女子  
師範学校の校史を記述する。その中の校舎略図、  
校舎配置図には、標本室が記され、本文の記述に  
より、1895(明治28)年に博物教室(標本室)が  
新設されたことがわかる。



# 師範学校の博物室・標本室

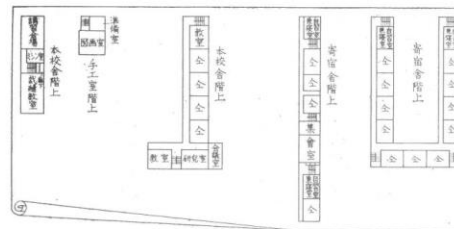
1 自然科学館の標本とその成り立ち

松本女子師範学校の理科標本室（博物教室）が1905（明治38）年の開校時に配置されていたことは、校舎配置図に確認できる。その構造は、先行する長野県師範学校の博物教室（標本室）に準じていたものと思われる。

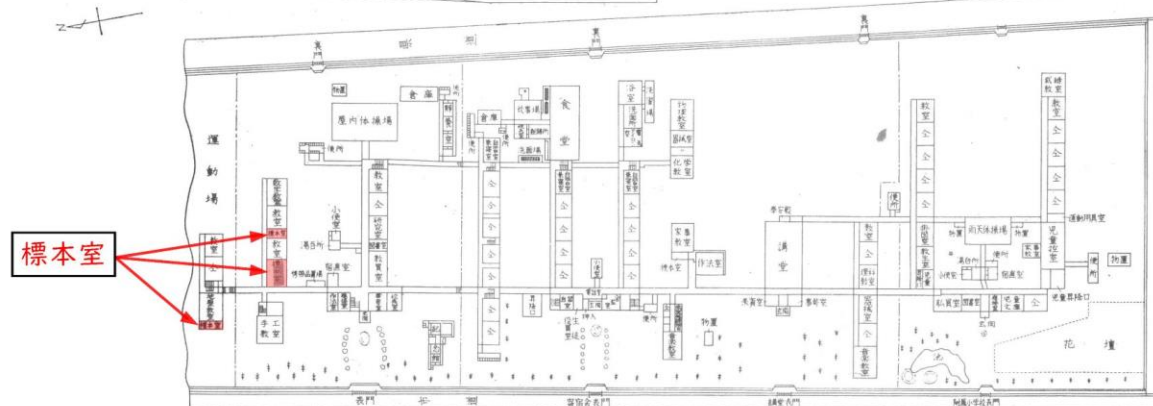
師範学校は1917（大正6）年に校舎の火災で標本室は焼失したが、再建された。表示の各図面は再建後のものである。松本女子師範学校の標本室の内部の様子はわからないが、昭和初期の師範学校の標本室の写真（絵はがき）から推測できる。



長野県師範学校 郷土研究室（博物標本室等）



長野県松本女子師範学校配置図  
（昭和7年12月以降）



信州大学教育学部九十年史 より（上下）

長野県師範学校並附属小学校校舎配置図（昭和7年6月）



# 松本女子師範学校の火災と 標本資料

1917(大正6)年3月18日、松本女子師範学校は本校教室全部と雨天体操場、講堂、物置などを全焼した。

当時の「信濃毎日新聞」が、高山植物の標準標本とライチョウ標本が被害を受けたに違いないとの記事を載せている。

## 松本女子師範学校の火災と標本資料

1917(大正6)年3月18日午後8時20分前後に松本女子師範学校で火災が発生、焼失した建物は10棟に及んだ。この火事により、松本女子師範学校に保管されていた高山植物の標準標本(タイプ標本)やライチョウの標本、校長の矢澤と教頭の河野によって作られた高山植物園などが焼失したといわれている。この火災は信濃毎日新聞、東京朝日新聞の記事に取り上げられ、“博物学会の大打撃”といわれた。  
※タイプ標本…生物の新種を発表するときに、その基準として指定された標本。

1917年3月20日発行の信濃毎日新聞



ライチョウ標本 1917年2月採集



コマクサ標本 1908年8月採集



展示しているライチョウ標本と高山植物標本は本学自然科学館所蔵の資料である。ライチョウ標本の採集時期は1917(大正6年)年6月以降のものが多数を占めている。火災で焼失した標本を補うため新たに採取、制作した可能性が考えられる。高山植物標本のうち、1908(明治41)年にハケ岳で採集と記録が残されているコマクサには松本女子師範学校のラベルがあり、矢澤が寄贈している。1917年3月以前の標本は、火災を免れたものである可能性が高い。

# 松本女子師範学校の郷土研究資料目録に掲載された資料のその後

## 1 自然科学館の標本とその成り立ち

### 自然科学館の標本

自然科学館

約 40 万点の植物標本を中心とした貴重な資料を所有している。

信州大学理学部

信州大学教養部

信州大学文理学部

旧制松本高等学校

教育学部松本分校

松本女子師範学校

標本類 997 点

前身校とそれを受け継ぐ学部の時代に収集された標本等の資料は、教育や研究のために活用され、現在、自然科学館に継承されている。



### 郷土研究資料目録

第一編 参考書類	1301	(冊)
郷土研究一般参考書	77	
長野県郷土研究資料	1224	258
教育の部	69	
宗教の部	693	
歴史の部		37
研究資料		35
伝記及び著作		53
統計書そのほか		53
古文書		279
松本藩儒臣多湖家集蔵古文書		236
文芸の部	49	
地理の部	132	
理科の部	23	
第二編 標本類	997	(点)
動物標本	245	
		3
かもしか		1
やまね		1
やまいたち		1
信濃山鳥類標本-主として南北安曇産-	170	
〃 鶺鴒科		1
〃 鶺鴒科		5
〃 雁鴉科		7
〃 鶺鴒科		13
〃 鶺鴒科		1
〃 雉科 (らいとう:20)		23
〃 扶輪科		2
〃 鶺鴒科		13
〃 鳩科		2
〃 鶺鴒科		4
〃 鶺鴒科		3
〃 鶺鴒科		6
〃 蚊母鳥科		1
〃 啄木鳥科		5
〃 鶺鴒科		1
〃 鶺鴒科		4
〃 ひよどり科		1
〃 鶺鴒科		6
〃 鶺鴒科		17
〃 鶺鴒科		8
〃 河鳥科		1
〃 みそざざい科		1
〃 燕科		2
〃 さんしょうくい科		1
〃 連雀科		2
〃 鶺鴒科		3
〃 五十雀科		1
〃 四十雀科		5
〃 鶺鴒科		4
〃 鶺鴒科		2
〃 めじろ科		1
〃 木走科		1
〃 雀科		23
奈良井川産淡水魚類標本	29	
鮎科		10
鮎科		6
本鰯科		3
鮎科		2
鮎科		3
鮎科		3
沙魚科		1
鮎科		1
藤の標本	28	
藤の標本	15	
食料品標本	56	
工業製品標本	50	
風俗標本	13	
先史時代遺物出土品	16	
掛図の部	23	
写真、絵葉書の部	588	
郷土研究器具類	6	
合計	2298	

### 中央図書館の蔵書

松本女子師範学校  
参考書類 1,301 冊を含む

松本女子師範学校蔵書は、教育学部松本分校を経て附属図書館に継承されている。

教育学部松本分校

旧制松本高等学校



信州大学文理学部

中央図書館  
蔵書 537,155 冊  
\*2021 年度末現在

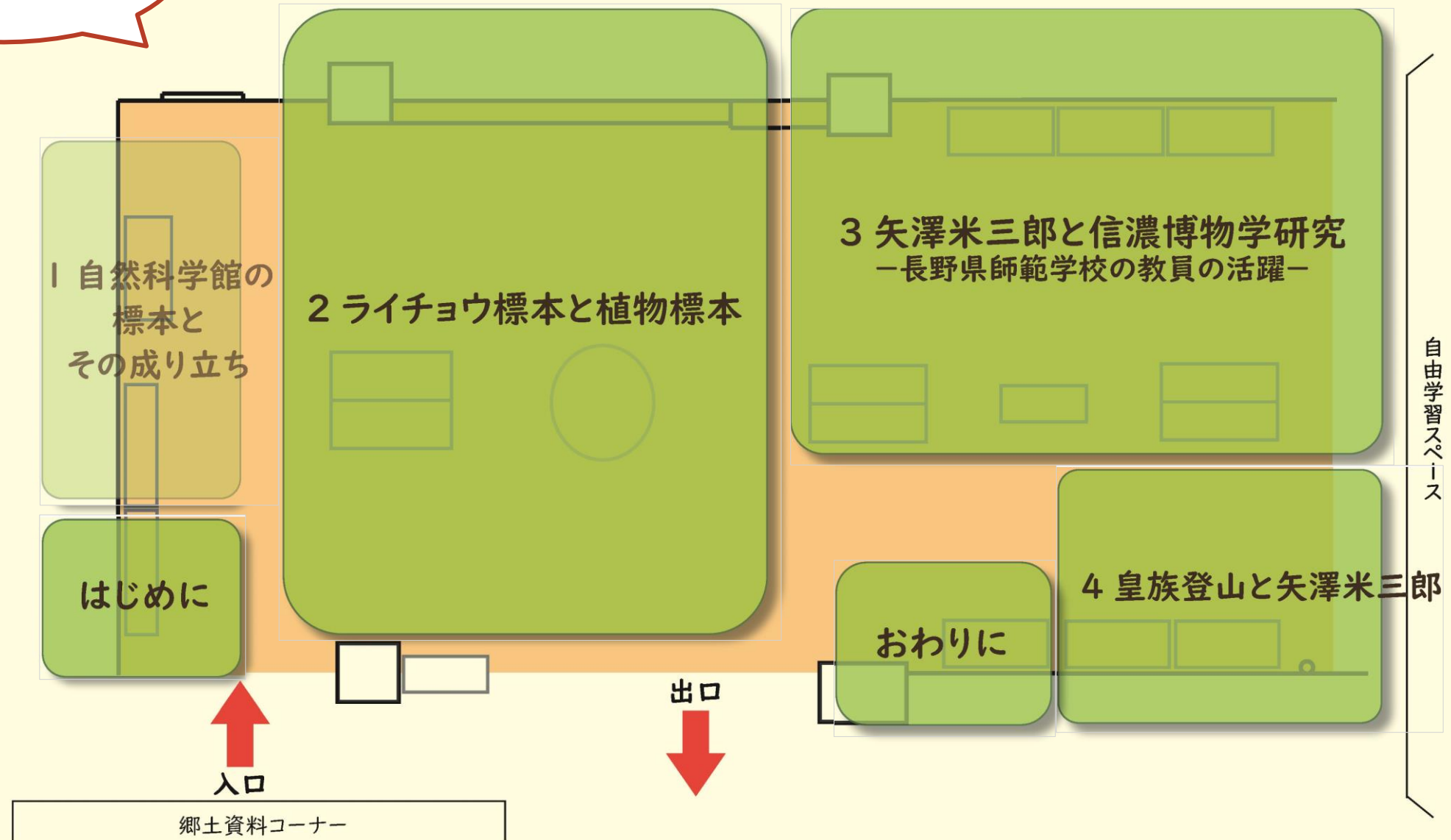
信州大学中央図書館では、前身校時代の蔵書を含む約 54 万冊を所蔵している。

目録に記載のない資料  
植物標本、鉱物標本 等



見たい展示エリアを  
クリックしてください

## 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図





## 2 ライチョウ標本と植物標本

### 2 ライチョウ標本と植物標本

自然科学館にはライチョウ標本、高山植物標本が収蔵されています。それらは矢澤米三郎等が師範学校教員時代に採集し、教育資料として保管されてきたものです。それらの標本を紹介し、その学術的価値について考えます。



## 自然科学館のライチョウ標本

自然科学館のライチョウ標本は、松本女子師範学校校長矢澤米三郎らが、明治末から大正期に採集したもので、近年の遺伝子解析により多くが北アルプス産であることが確認された。季節に伴う換羽状況がわかり、また、成体の骨格標本や千島産の本剥製は他に類がないもので、極めて貴重な資料である。矢澤著『雷鳥』（1929年 岩波書店）の口絵写真や図版の元ともなっている。

これらは松本女子師範学校の旧蔵資料で、戦後、教育学部松本分校標本室を経て、旧教養部に長い間保管されていたもので、医学部赤レンガ倉庫を経て、自然科学館の所蔵となった。採集時から100年以上経過しており、経年の劣化もみられ、今後の補修も課題である。



貴重な資料である成体の骨格標本と千島産本剥製



標本を参考に描かれた矢澤著『雷鳥』の図版

# 展示ライチョウ標本一覧

※画像をクリックすると拡大表示します。

## 2 ライチョウ標本と植物標本



展示資料  
No.3-1

ライチョウ標本  
オス 春毛  
1918(大正7)年5月10日 採集



展示資料  
No.3-2

ライチョウ標本  
メス 春毛  
1918(大正7)年5月10日 採集



展示資料  
No.3-3

ライチョウ標本  
オス 夏毛  
1918(大正7)年7月 採集



展示資料  
No.3-4

ライチョウ標本  
メス 夏毛  
1918(大正7)年7月28日 採集



展示資料  
No.3-5

ライチョウ標本  
オス 秋毛  
1917(大正6)年 採集



展示資料  
No.3-6

ライチョウ標本  
メス 秋毛  
1920(大正9)年9月16日 採集



展示資料  
No.3-7

ライチョウ標本  
オス 冬毛  
明治?年11月17日 採集



展示資料  
No.3-8

ライチョウ標本  
メス 冬毛  
1917(大正6)年2月 採集

# ライチョウ標本 オス 春毛

採取地 信濃

1918(大正7)年5月10日 採集

自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# ライチョウ標本 メス 春毛

採取地 信濃

1918(大正7)年5月10日 採集

自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# ライチョウ標本 オス 夏毛

採取地 信濃  
1918(大正7)年7月 採集  
自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# ライチョウ標本 メス 夏毛(左)

採取地 白馬山頂上  
1918(大正7)年7月28日 採集  
自然科学館 蔵

# ライチョウ標本 幼鳥 夏毛(右)

採取地 信濃  
1917(大正6)年7月28日 採集  
自然科学館 蔵



# ライチョウ標本 オス 秋毛

採取地 不明  
1917(大正6)年 採集  
自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)





# ライチョウ標本 メス 秋毛

採取地 穂高

1920(大正9)年9月16日 採集

自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# ライチョウ標本 オス 冬毛

採取地 不明  
明治?年11月17日 採集  
自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# ライチョウ標本 メス 冬毛

採取地 信濃

1917(大正6)年2月 採集

自然科学館 蔵



[ライチョウ標本一覧へ戻る](#)



# 『郷土研究資料目録』 「らいてう」に記載されているライチョウ標本一覧

## 2 ライチョウ標本と植物標本

く む な ぐ ろ  
 ば 鵓 科  
 い かる ち どり  
 こ ち どり  
 た げ り  
 ほ う ろ く し ぎ  
 い そ し ぎ  
 く さ し ぎ  
 あ か 多 り ひ れ あ し し ぎ  
 と う ね ん し ぎ

千島産らいてう 雄  
 同 (雌、同 9、10、18 捕)  
 同 (雄、明治41、11、7 捕)  
 り いてう (雄、大正6、9 捕)  
 同 (雌、同 9、10、18 捕)  
 同 (雄、明治41、11、7 捕)



お ぼ た か  
 こ の り (雄)  
 は い た か (雌)  
 へ つ さ い (雄)  
 つ み (雌)  
 い ぬ わ し  
 は ち く ま  
 と び  
 の す り  
 け あ し の す り  
 ち よ う げ ん ぼ う  
 こ ち よ う げ ん ぼ う  
 み さ ご 鵓 科  
 や ま どり 科

は ま し ぎ  
 た し ぎ  
 あ を し ぎ  
 や ま し ぎ 鳩 科  
 き ば と  
 あ を ば と 杜 鵑 科  
 く わ く こ う  
 ほ と と ぎ す  
 つ つ どり  
 じ ろ い ち 翡翠 科  
 あ か せ う び ん  
 や ま せ み  
 か は せ み 泉 鴉 科

八五



展示のライチョウ標本

ら いてう (雄、大正6、2、1 捕)  
 同 (雌、同 )  
 同 (雄、同 7、3、1 捕)  
 同 (雌、同 )  
 同 (雄、同 7、5、10 捕)  
 同 (雌、同 )  
 同 (雄、同 6、6 )  
 同 (雌、同 6、7、1 捕)  
 同 (雄、同 7、7、1 捕)  
 同 (雌、同 7、7、10 捕)  
 同 (雄、同 6、7、29 捕)  
 同 (雌、同 6、7、28 捕)  
 同 (雛、同 6、8、 捕)  
 同 (雌、同 6、9、25 捕)  
 同 (雄、同 9、9、1 捕)  
 同 (雌、同 9、9、16 捕)



八四



# 100年前の遺伝子を分析する

信州大学自然科学館にはニホンライチョウの剥製が40点以上収蔵されています。これらは、明治時代や大正時代など、100年以上前に作製された剥製です。

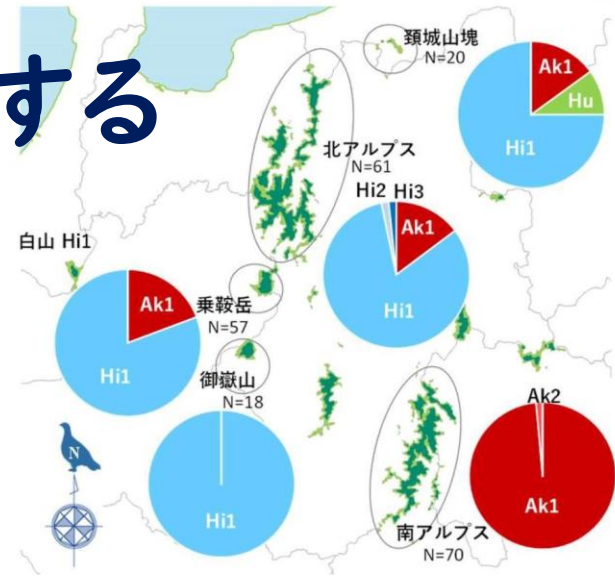
現在、剥製からDNAを抽出し、ミトコンドリアDNA (mtDNA) の調整領域の遺伝子型（塩基配列から決定されるハプロタイプ）の解析を行っています。



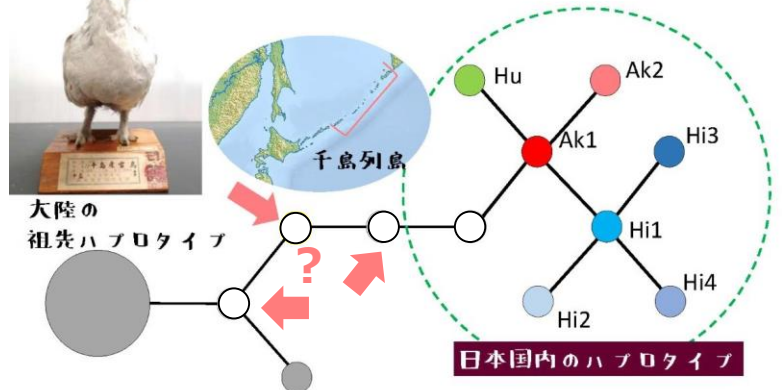
足裏の皮膚を採取してDNAを抽出

現存のライチョウ集団のmtDNA分析から、これまでに確認されたハプロタイプは7種あります。AKIは御嶽山以外の山岳で共通して見られますが、北アルプスから御嶽山で見られるHiIは南アルプスでは確認されていません。

自然科学館に収蔵されている剥製のハプロタイプは大部分がHiIで、一部AKIが確認されています。また、大変貴重な千島列島産の剥製もあり、日本と大陸をつなぐ重要な集団として、そのハプロタイプを現在分析中です。



現存のライチョウ集団におけるハプロタイプ構成  
中村・小林 (2018) をもとに作成



○：現生のライチョウからは見つかっておらず、絶滅したと思われるハプロタイプ

ニホンライチョウのミトコンドリアDNAハプロタイプネットワーク図

西海 (2020) を改変



# 剥製標本とは？

標本は、私たちが情報を得たいと思う対象の一部を抽出したものです。標本には鉱物標本、押し葉標本、剥製標本など様々な種類があります。

剥製標本は、動物の死体から骨や筋肉、内臓などを除去し、体毛や爪の（鳥類ではくちばしも）ついた皮だけの状態にしたものに防腐処理をして長期間保つようにし、綿や芯材を入れて形を整えたものです。

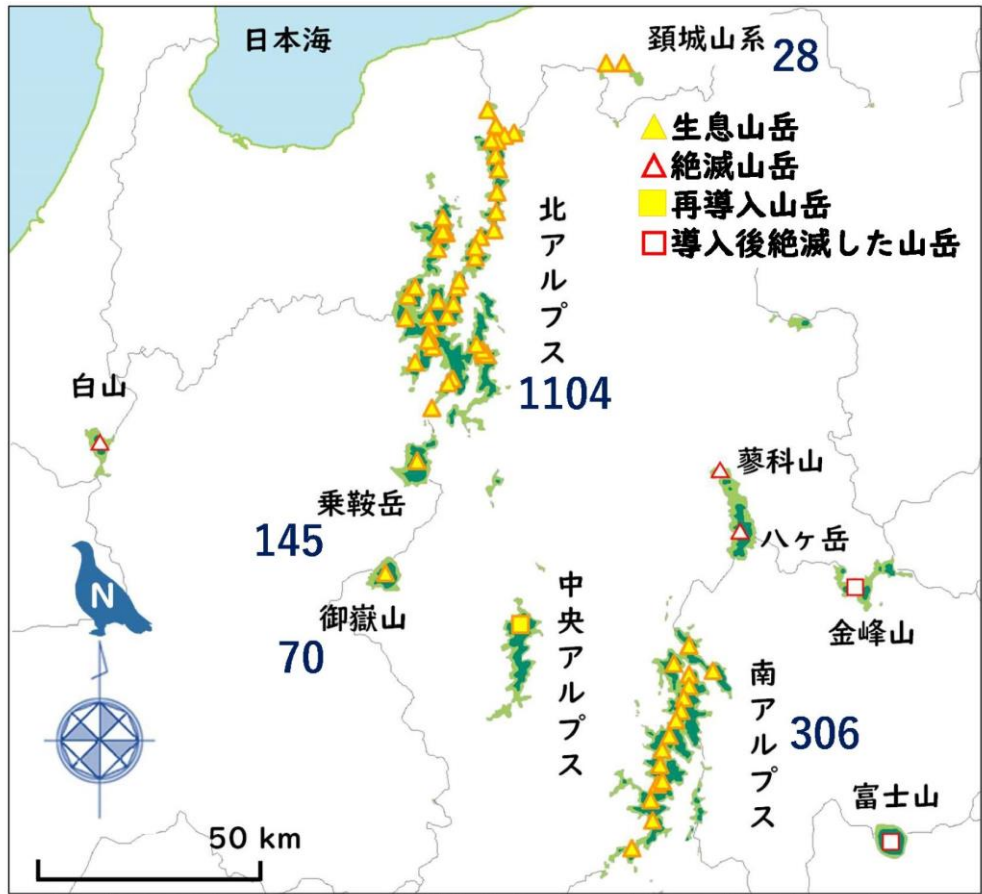


剥製標本には、本剥製と仮剥製があり、**本剥製**は立ち姿や、翼を広げた姿など、生きているかのようにさまざまな姿勢をしています。**仮剥製**は、本剥製と同じように作られますが、主に研究用であり、体長や翼長などの計測を正確に行う必要があることから、姿勢が（国際的に）統一されています。

剥製は採集された当時の生き物の姿を長期間維持しています。すでにこの地上で生きた姿を見ることができない生物も剥製として保存され、その姿を私たちは見ることができます。

近年では、剥製から遺伝子を抽出することも可能になりました。つまり、絶滅した生き物や集団の遺伝子を対象にした研究が可能になったのです。

# ニホンライチョウの生息山岳



\*白山では2009年に1羽のメスが確認されましたが、近年は確認できていません  
 \*\*山岳名近くの数値は、2000年代の調査に基づいた、ライチョウの推定生息数です。



Photo by A. Kobayashi

ライチョウはキジ目キジ科として、キジやヤマドリ、ウズラなどの仲間に分類されています。「氷河期の遺存種」ともよばれ、現在は長野県など、本州中部の高山帯にのみ生息しています。

ライチョウが棲む高山帯は、森林限界以上の標高域であり、言葉どおり森林を形成するような高木が生育できない厳しい環境です。生息域内で推定されている個体数は1700羽で、環境省の絶滅危惧IB類（近い将来における絶滅の危険性が高い種）に指定されています。





## 自然科学館の高山植物標本

自然科学館には様々な来歴の植物標本がある。そのなかで最も古い履歴を持つのが、松本女子師範学校標本室に由来する初代校長矢澤米三郎らによって収集された標本である。

本展示では、矢澤が大正時代を中心に収集し、女子師範学校に寄贈した標本と、青年時代に矢澤らの指導を得て、植物学者として多くの標本を信州大学に寄贈した横内斎氏の標本を展示した。



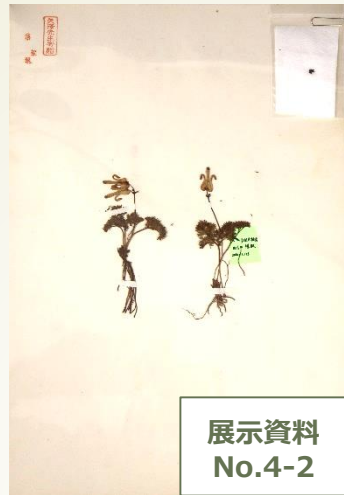
# 展示高山植物標本一覽

※画像をクリックすると拡大表示します。

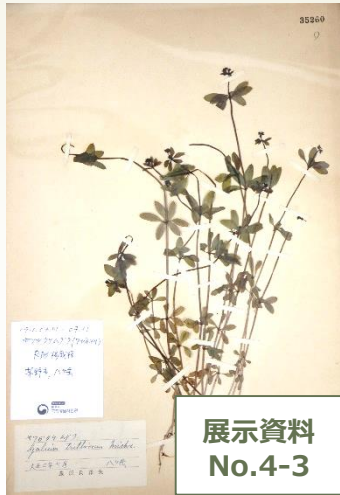
## 2 ライチョウ標本と植物標本



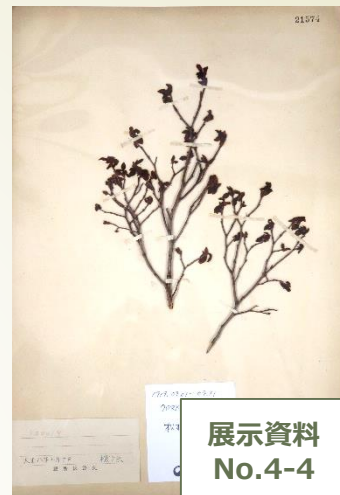
展示資料 No.4-1  
コマクサ標本  
1908(明治41)年採集



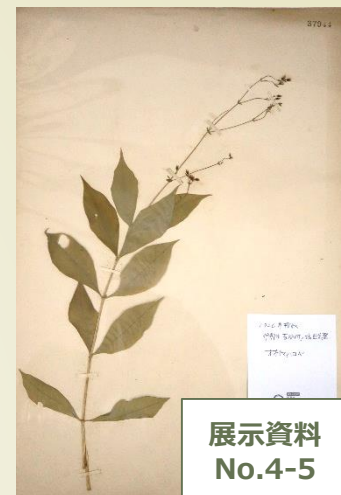
展示資料 No.4-2  
コマクサ標本  
1912(大正1)年採集



展示資料 No.4-3  
ヤツガタケムグラ標本  
1914(大正3)年採集



展示資料 No.4-4  
クロマメノキ標本  
1919(大正8)年採集



展示資料 No.4-5  
オオヤマハコベ標本  
1926(大正15)年採集



展示資料 No.4-6  
ミヤマチドリ標本  
1915(大正3)年採集



展示資料 No.4-7  
ミヤマチドリ標本  
不明



展示資料 No.4-8  
オオヤマサギソウ標本  
1920(大正9)年採集



展示資料 No.4-9  
オオヤマサギソウ標本  
不明



展示資料 No.4-10  
コマクサ標本  
1930(昭和5)年採集

## コマクサ標本

1908(明治41)年採集  
自然科学館蔵

1908(明治41)年8月にハケ岳で採集したもの。松本女子師範学校専用の標本カードを使用。台紙左上に「矢澤先生寄贈」の朱印を捺す。



## コマクサ標本

1912(大正1)年 採集  
自然科学館 蔵

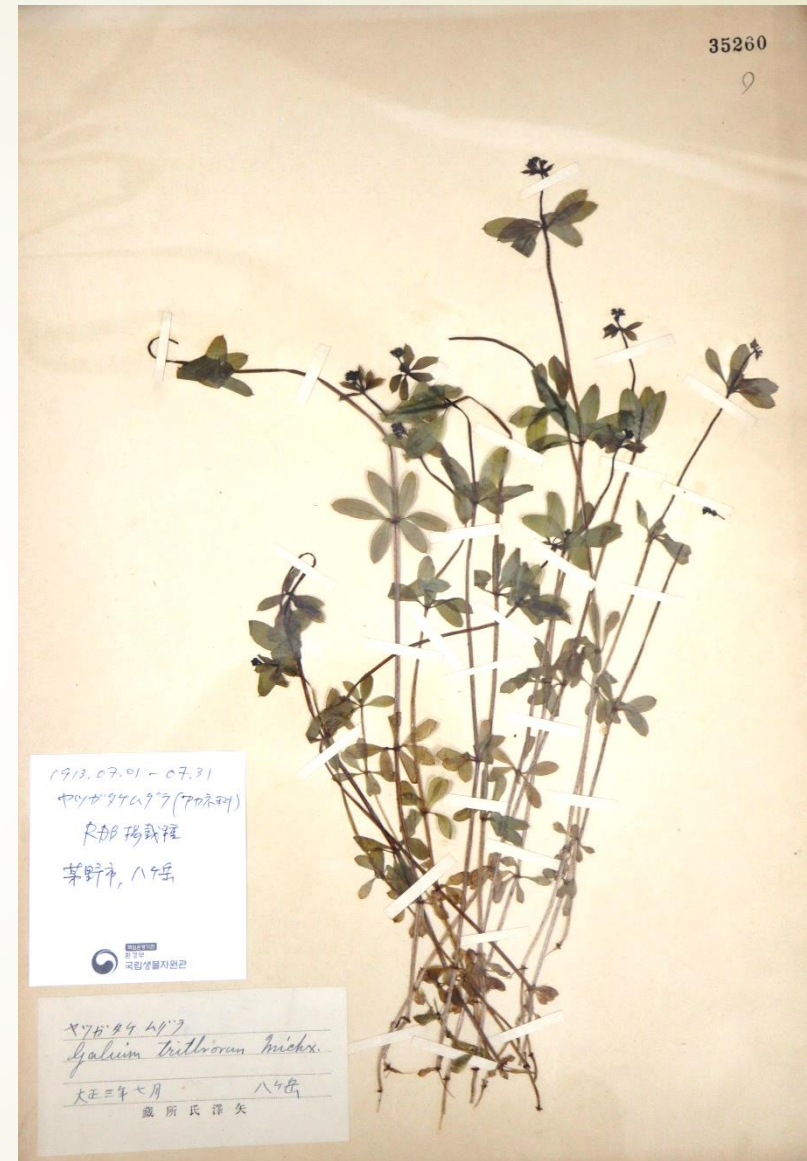
1912(大正1)年8月6日にハケ岳で採集したもの。信濃博物調査会の標本カードを使用。台紙左上に「矢澤先生寄贈」の朱印を捺す。



# ヤツガタケムグラ標本

1914(大正3)年 採集  
自然科学館 蔵

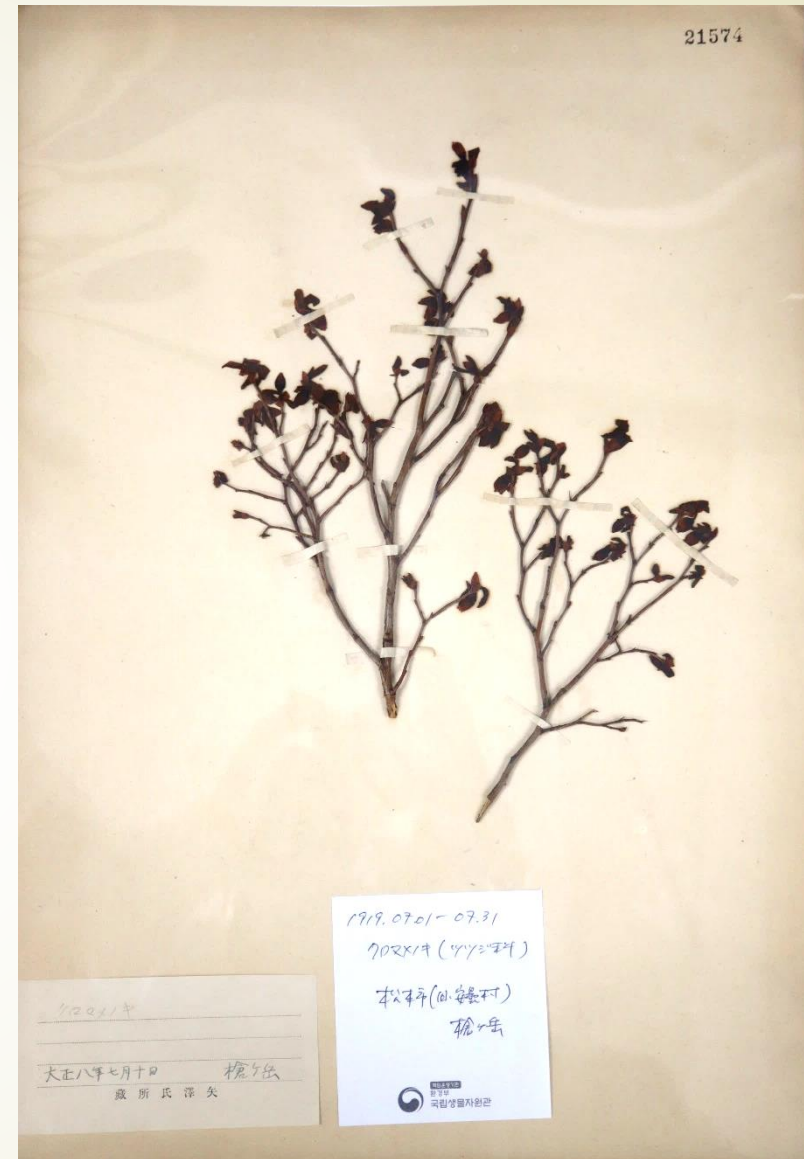
1914(大正3)年7月にハケ岳で採集  
したもの。矢澤氏所蔵と記された標本  
カードを使用。



## クロマメノキ標本

1919(大正8)年 採集  
自然科学館 蔵

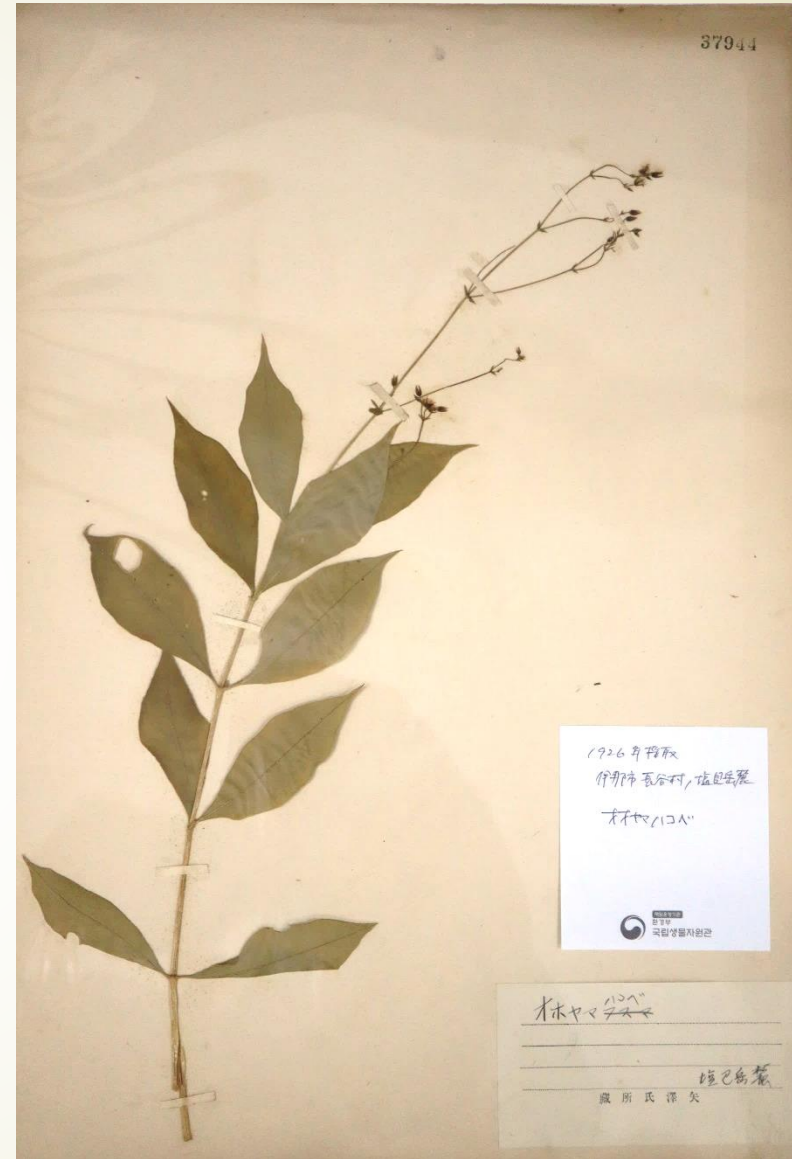
1919(大正8)年7月10日に槍ヶ岳で  
採集したもの。矢澤氏所蔵と記された標  
本カードを使用。



# オオヤマハコベ標本

1926(大正15)年 採集  
自然科学館 蔵

1926(大正15)年に塩見岳麓で採集  
したもの。矢澤氏所蔵と記された標本  
カードを使用。



## ミヤマチドリ標本

1914(大正3)年 採集  
自然科学館 蔵

1914(大正3)年にハヶ岳で採集した  
もの。はじめガッサンチドリとしていたが、  
ミヤマチドリに訂正している。信濃博物  
調査会の標本カードを使用。





## ミヤマチドリ標本

採集地 不明  
自然科学館 蔵

塩見岳で採集したもの。採集年は不明。  
信濃博物調査会の標本カードを使用。



植物標本一覧へ戻る



# オオヤマサギソウ標本

1920(大正9)年 採集  
自然科学館 蔵

1920(大正9)年7月に上高地で採集  
したもの。信濃博物調査会の標本カード  
を使用。



# オオヤマサギソウ標本

採集地 不明  
自然科学館 蔵

白馬岳で採集したもの。採集年は不明。  
信濃博物調査会の標本カードを使用。



植物標本一覧へ戻る



## コマクサ標本

1930(昭和5)年 採集  
自然科学館 蔵

矢澤米三郎の指導を受けた植物学者・横内斎が1930(昭和5)年7月に乗鞍岳で採集したもの。「長野県の植物」「横内斎氏収集・寄贈標本」と印刷された標本カードを使用。横内家が信州大学に寄贈するに際して付した。



(参考) 「100年の時を超えて知る、コマクサの進化史。」信州大学ウェブサイト

植物標本一覧へ戻る



# 掛軸 雷鳥の羽毛の変化(其四 雌)

矢澤米三郎 画  
大正時代  
自然科学館 蔵

ライチョウの羽毛の変化(換羽)を図化した掛軸。雌雄各2幅、全4幅存在したと思われるが、本学には雌の2幅が伝わる。雄の2幅は松本市立博物館所蔵。右の写真は、8月から11月の変化を示したもの。右下には「九月十六日(穂高岳)」とあり、自然科学館所蔵資料の中に該当する標本がある。



## (参考)

### 2 ライチョウ標本と 植物標本

自然科学館に継承されているライチョウ標本(左)と矢澤が描いたライチョウ(右)



(ライチョウ標本) 採取地 穂高、1920(大正9)年9月16日 採集  
自然科学館 蔵



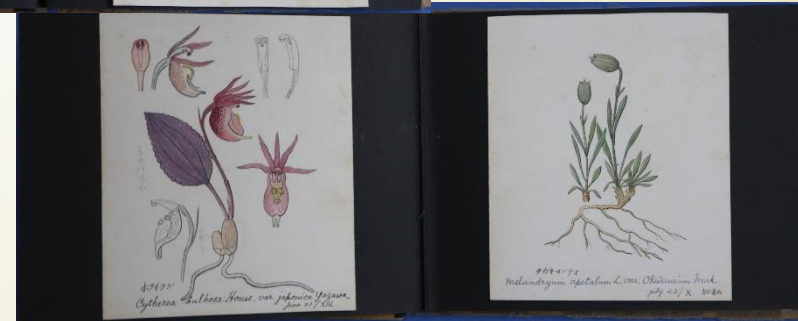
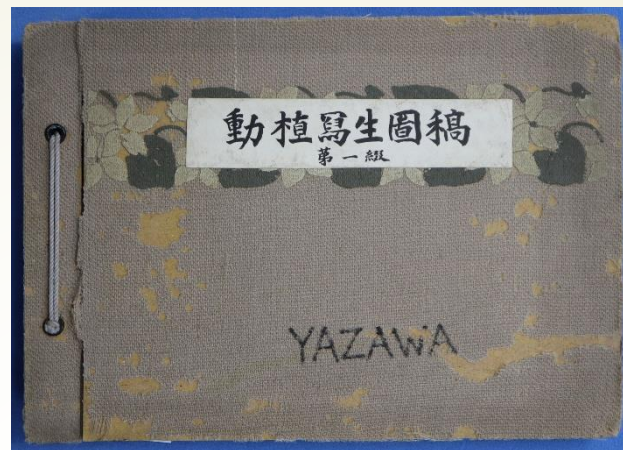
(掛軸) 矢澤米三郎 画、九月十六日(穂高岳)  
自然科学館 蔵

標本のくちばしや足の爪は経年変化で変色し、羽の色は褪せてはいるが、掛軸の画は細かい描写でとても鮮やかに描かれ、特徴をよくとらえている。

# 『動植写生図稿』

矢澤米三郎 画  
年未詳(大正~昭和初期か)  
諏訪市博物館 蔵

縦横10cmほどの画用紙に肉筆で描き、それをアルバムに貼ったもの。矢澤のスケッチ力を知ることができる。アルバムの表紙に墨でYAZAWAと記す。



## 長野県松本女子師範学校の蔵書

松本女子師範学校の蔵書、約9,000冊は長野師範学校を経て、信州大学附属図書館に引き継がれた。『郷土研究資料目録』には、長野県や教育に関する図書のほか、明治期の教科書、松本藩多湖家に伝わる藩校資料、古文書など約1,300点が参考書として掲載されている。

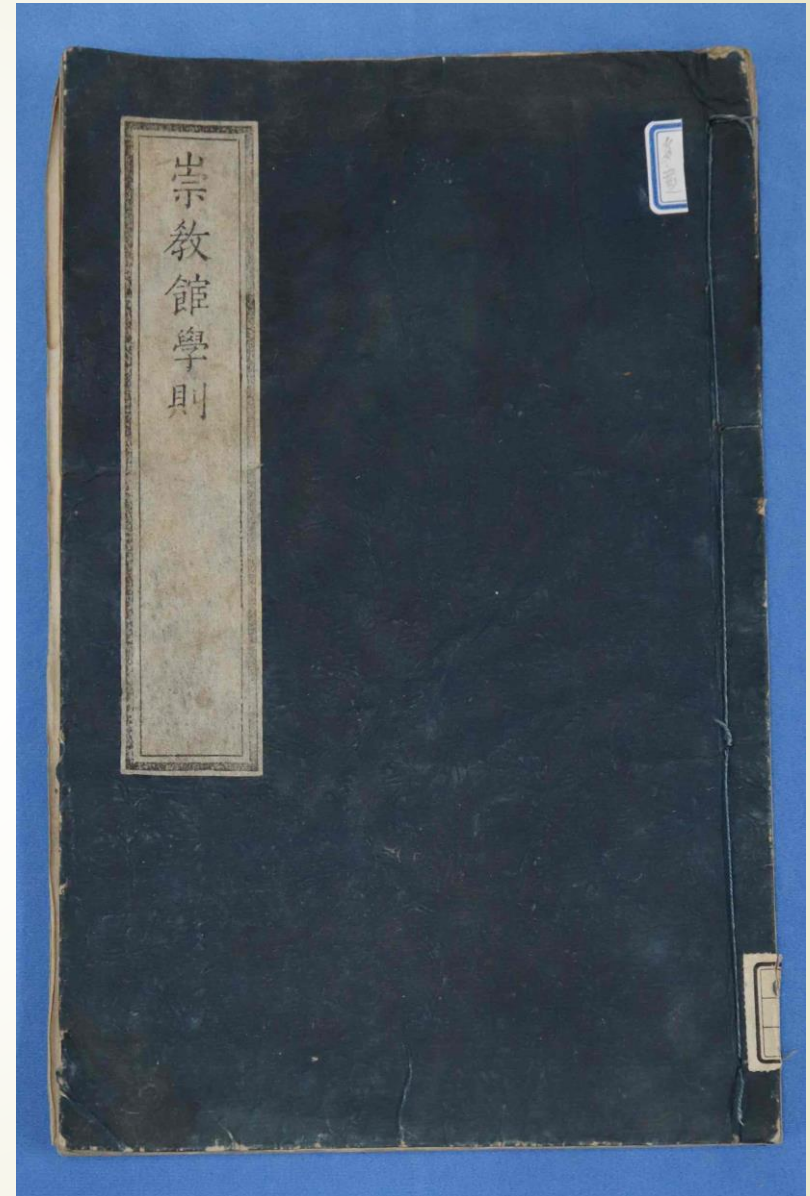




# 『崇教館学則』

1846(弘化3)年12月刊  
中央図書館 蔵

松本藩儒臣多湖家所蔵古文書  
松本藩の藩校「崇教館」学則。公儀の命により多湖貫斎(安元)が作成した。多湖貫斎自筆。1807(文化4)年の初案から弘化3年の定稿までの諸段階のものが一冊にまとめられており、改案の様子をたどることができる、松本藩校の教育に関わる重要な資料。



# 『小学新理科』

卷一、卷二、卷三、卷四

文學社  
1901(明治34)年  
中央図書館 蔵

奥付に「高等小学校児童用教科書」とあることから、高等小学校(現在の中学生)の理科の教科書として用いられていたもの。「教師用」も出版された。

全4巻。巻一は1年生用、巻二は2年生用と学年別になっている。目次を見ると、巻一では、麦や蟬といった身近な動植物を中心に、後半では水や火、鉛や銅といった鉱物などにも言及、巻二では植物の効用、魚類、鳥類、哺乳類などが、巻三では、水の変化、空気の成分、電気など、巻四では人体の構造や電気、生物の進化などを扱っている。各巻の巻頭には、彩色の極めて詳細なイラストが添えられている。



展示資料 No.7-3

2 ライチョウ標本と  
植物標本

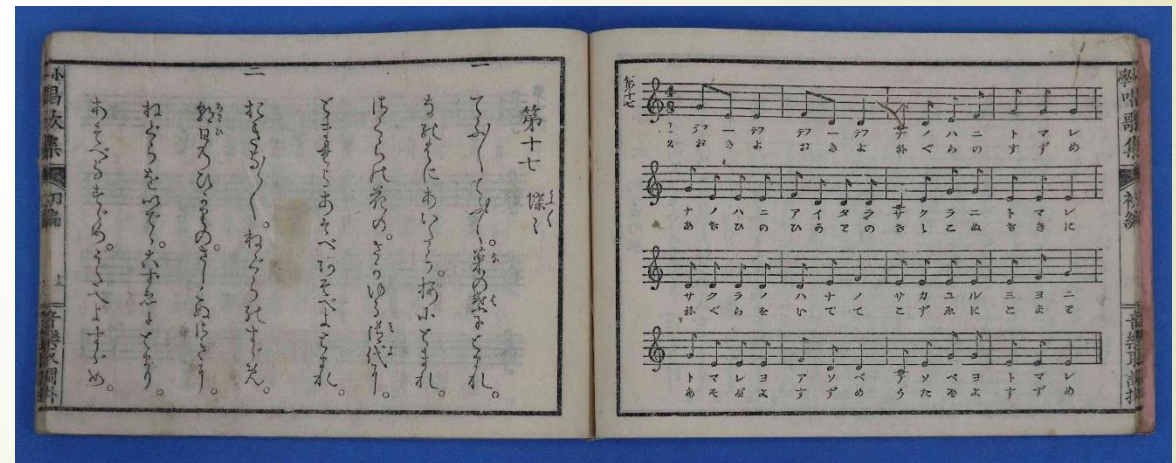
小學校師範學校中學校教科書用

# 『小学唱歌集』 初編

文部省音楽取調掛編纂  
1881(明治14)年  
中央図書館 蔵

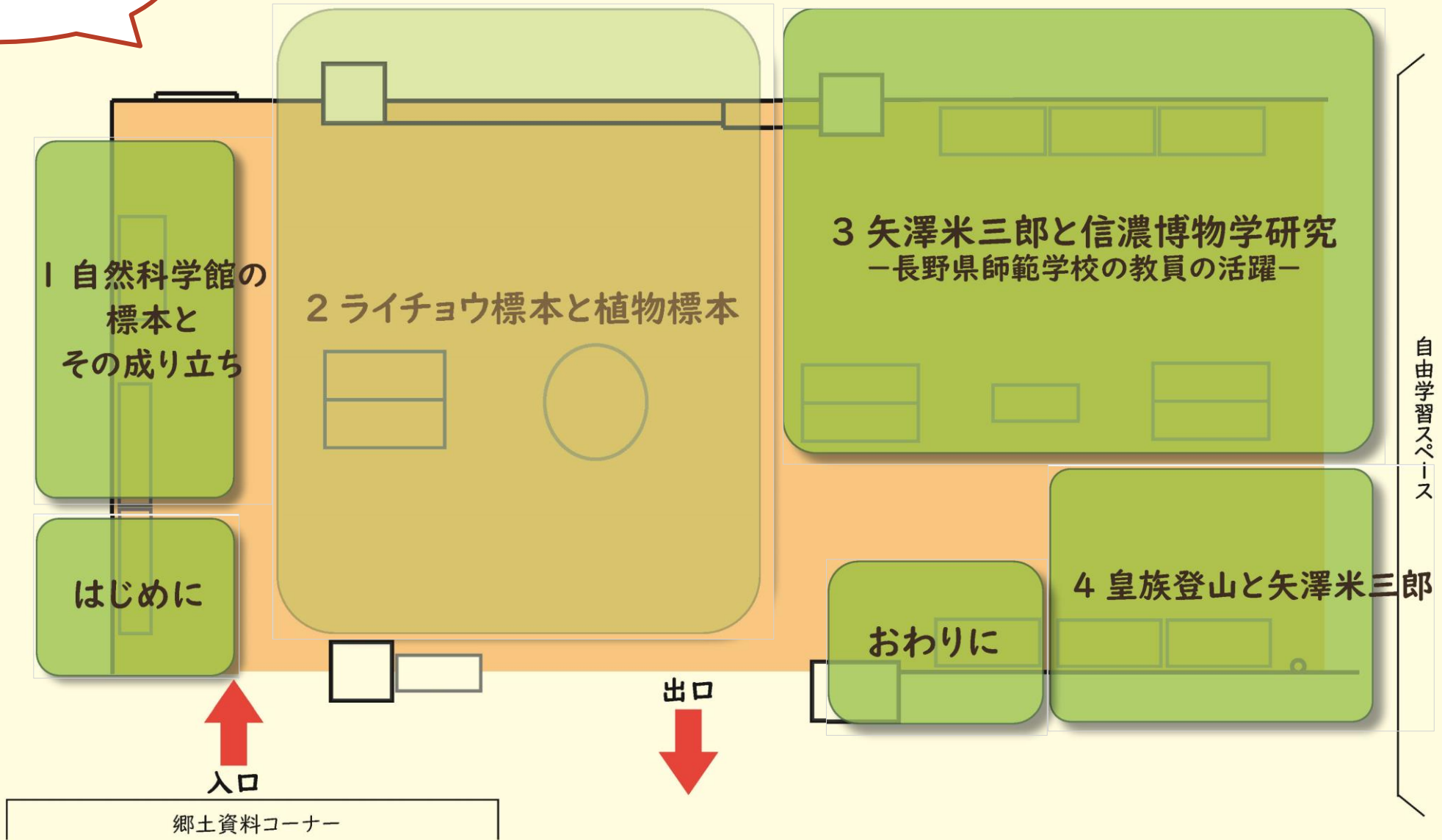
表紙に、「松本女子師範学校郷土室」のラベルが貼られている。

『小学唱歌集』は、文部省音楽取調掛が編集した日本初の五線譜による音楽教材で蛍の光(蛍となっている)、ちょうちょ、君が代などの唱歌が掲載されている。緒言(まえがき)を書いた音楽取調掛長の伊澤修二は、現在の長野県伊那市出身者で、唱歌を教育に取り入れた、近代日本の音楽教育の開拓者として知られる。



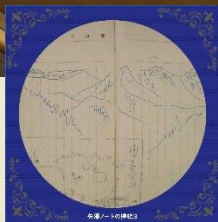
# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



### 3 矢澤米三郎と信濃博物学研究 —長野県師範学校の教員の活躍—

明治・大正期の信州の博物学研究をリードし、ライチョウ標本、植物標本を収集・保存した矢澤米三郎と河野齡蔵の活動を代表的著作物とともに紹介します。また、彼らを取り巻いて、博物学研究を推進した明治・大正期の県内博物学者を紹介し、彼らの中に師範学校出身者が多くいたことを示します。

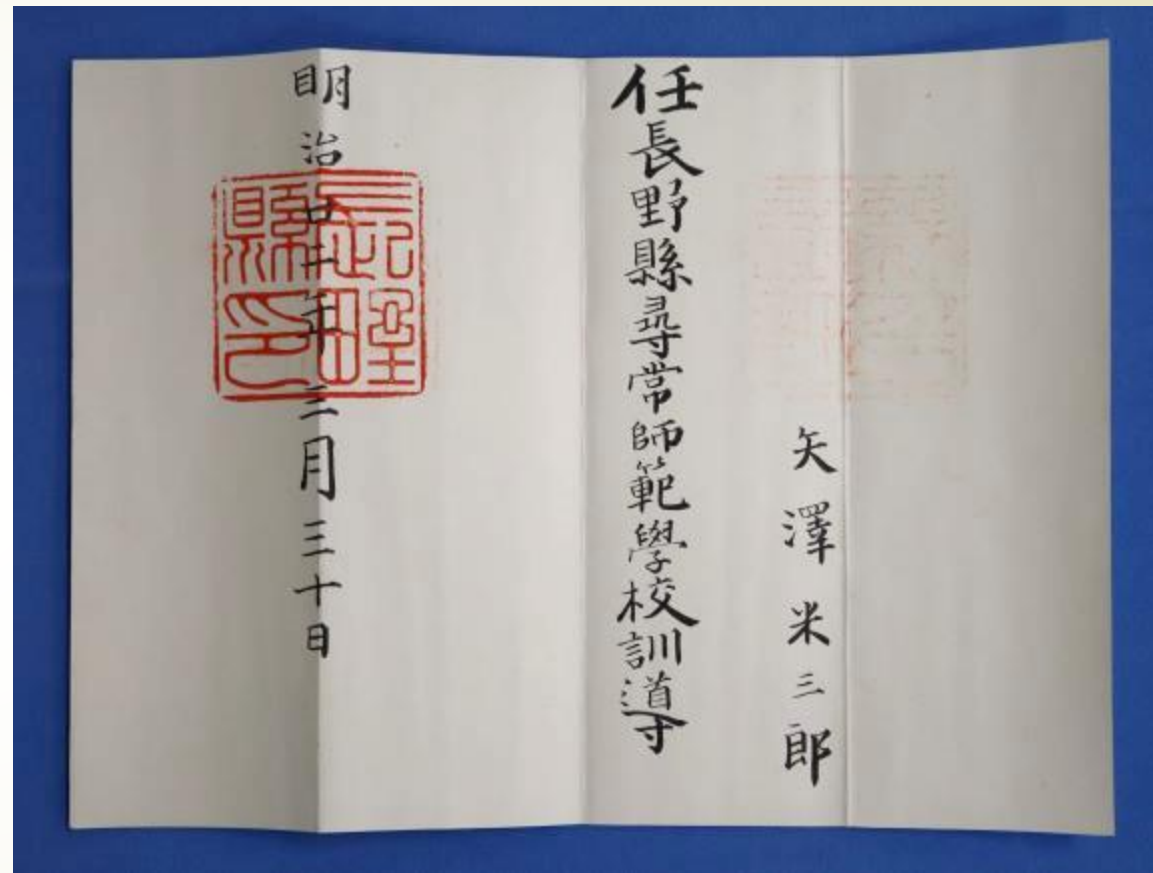


# 辞令

## (長野県尋常師範学校訓導)

1889(明治22)年  
諏訪市博物館 蔵

1889(明治22)年、長野県師範学校を卒業した矢澤は、同校訓導の辞令を受け、教員としての歩みを始めた。



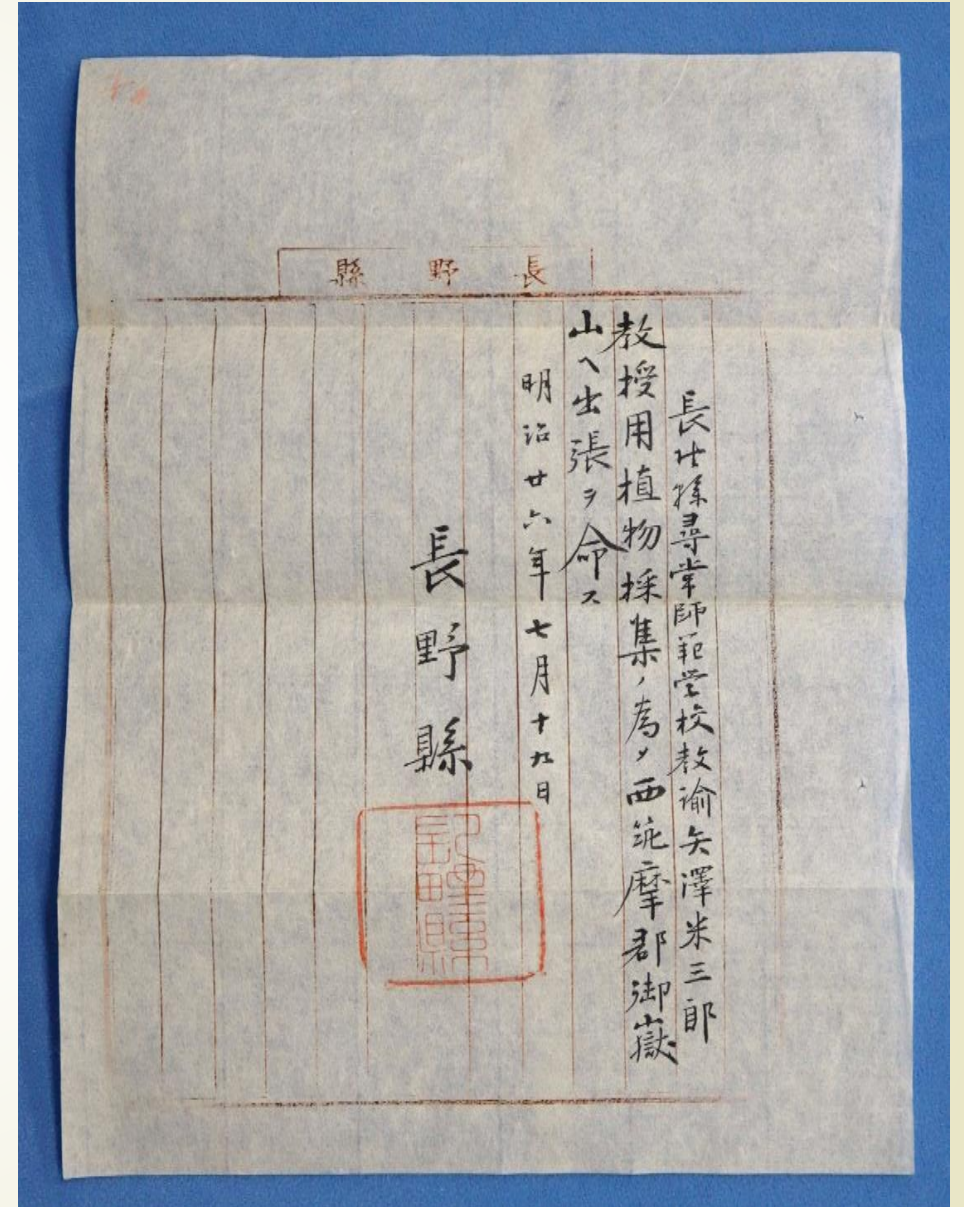
# 出張命令

(教授用植物採集のため御岳山へ出張)

1893(明治26)年  
諏訪市博物館 蔵

1893(明治26)年、矢澤は教授用の植物採集のため、御岳山に登る。矢澤らの標本採集が公務出張として行われたことがわかる。

<矢澤米三郎と長野県師範学校>

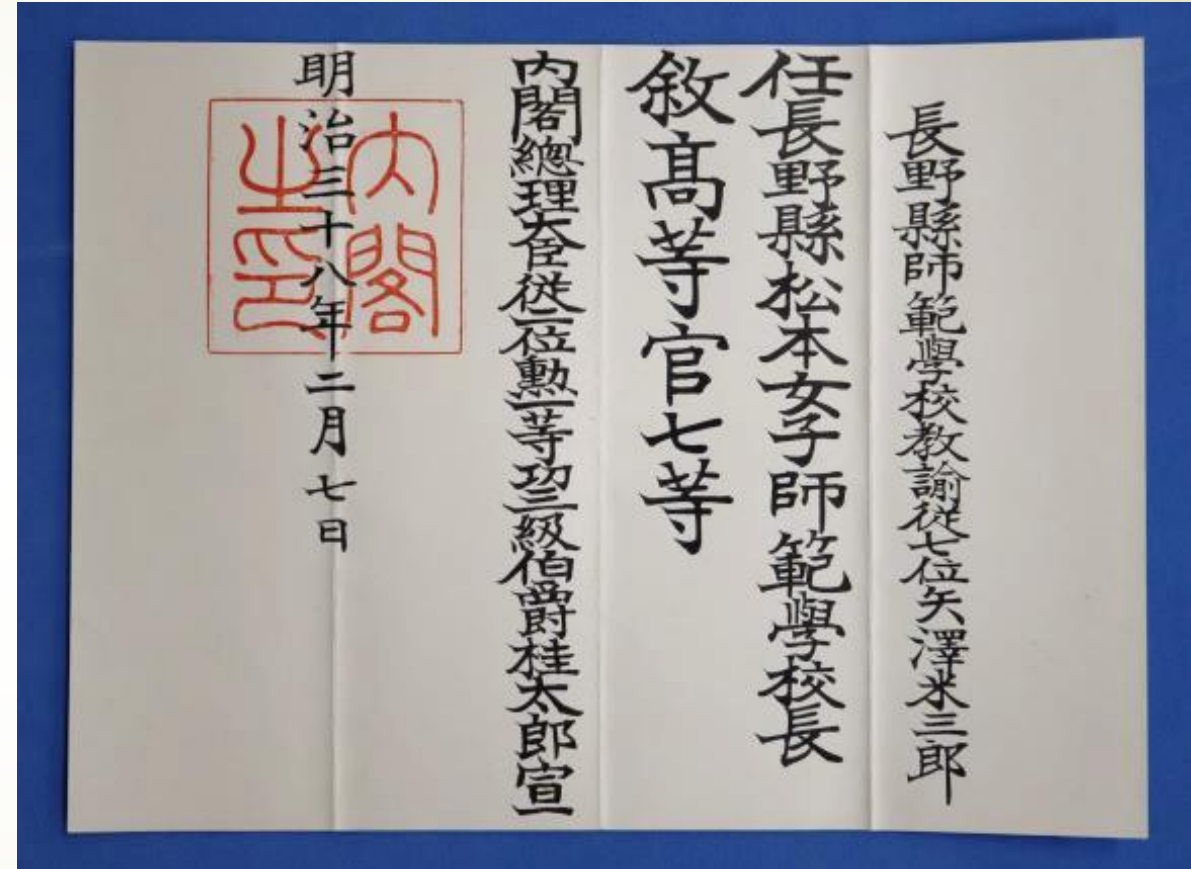


# 辞令

(松本女子師範学校長)

1905(明治38)年  
諏訪市博物館 蔵

1905(明治38)年、長野県は師範学校女子部を独立させ、松本女子師範学校を創設。矢澤はその初代校長に任命され、教頭には下伊那高等女学校長の河野齡蔵を迎えた。





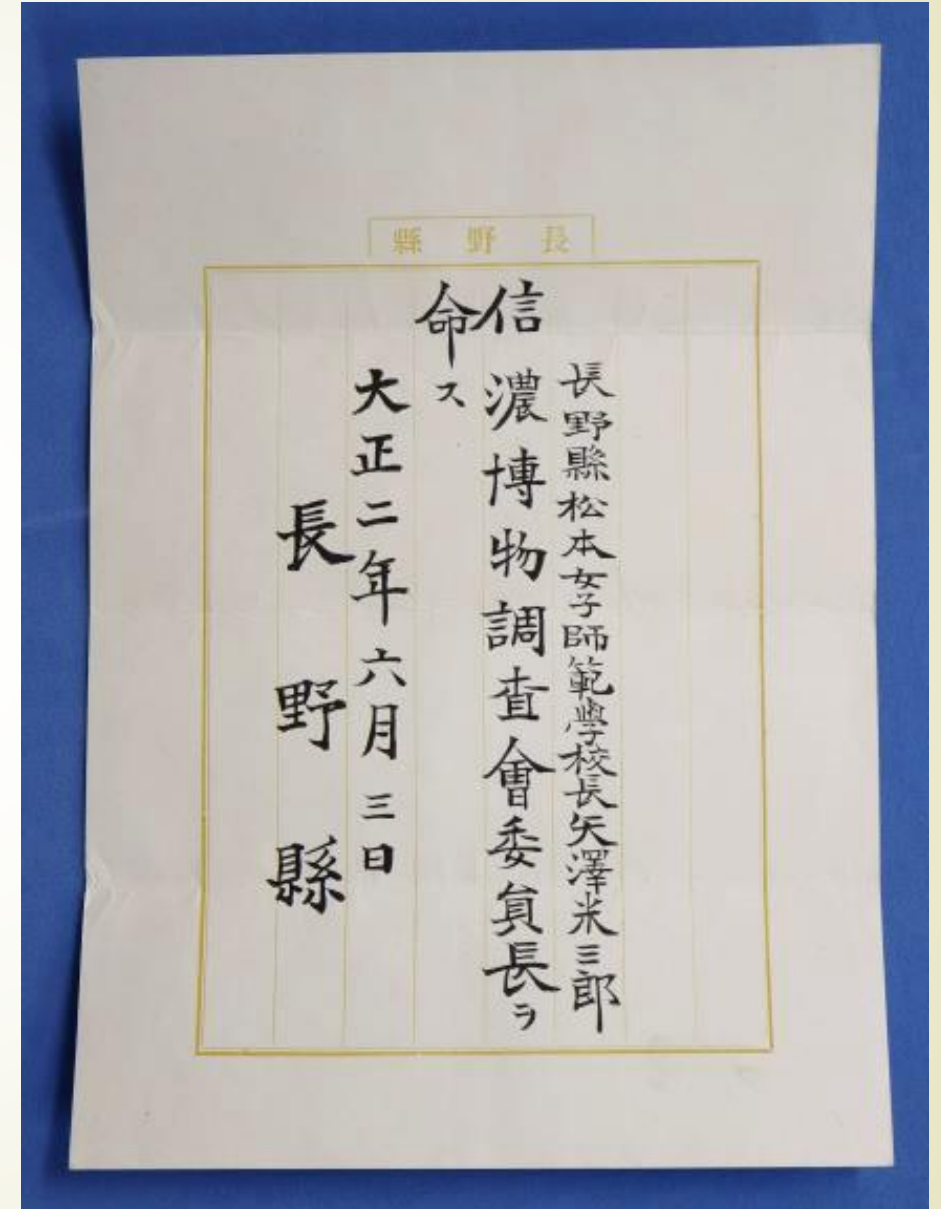
# 辞令

(信濃博物調査会委員長)

1913(大正2)年  
諏訪市博物館 蔵

師範学校を含む中等学校に、博物標本をそろえるため、1912(明治45)年中等学校長会議に建議して、中等学校教員による標本収集を開始、長野・松本両師範学校に保管して研究資料とした。1913(大正2)年には県の予算化がなされ、矢澤はこの調査会の委員長に任命されている。信濃博物学会の活動が停止する時期にあたっている。展示した植物標本の中にこの調査による標本がある。

<矢澤米三郎と長野県師範学校>

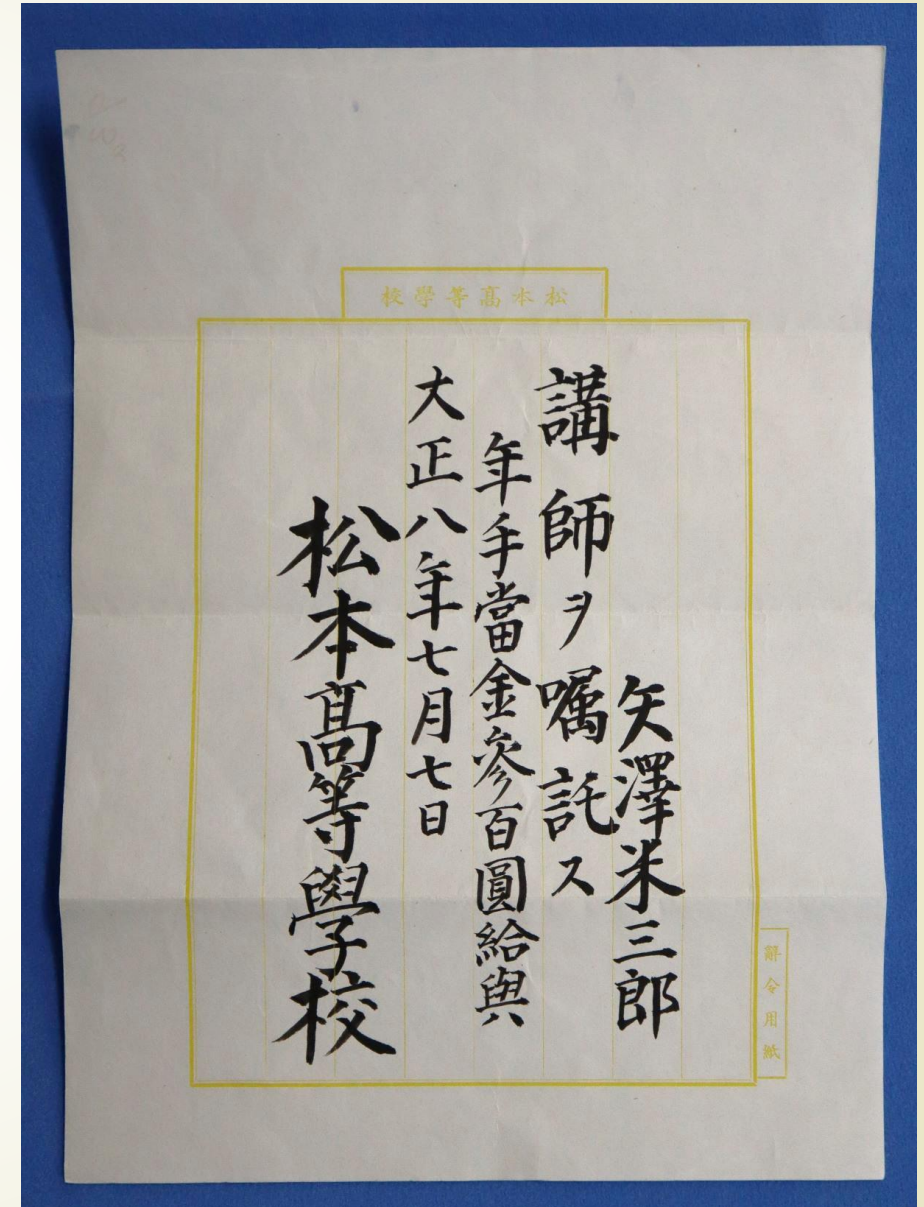


# 辞令 (松本高等学校講師)

1919(大正8)年  
諏訪市博物館 蔵

1919(大正8)年、松本高等学校が全国9番目の高等学校として開校すると、矢澤は生物学の講座を担当する講師に任命された。なお、開校の翌年に発足した松本高等学校山岳部の初代部長になっている。

<矢澤米三郎と長野県師範学校>



## 『草鞋』

1921(大正10)年  
中央図書館 蔵

『草鞋』・『わらぢ』は、人文・経法・理学部の前身校である松本高等学校の山岳部報である。

山岳部は、松高が開校した翌年の1920(大正9)年1月の校友会発足と同時に創部となり、1921(大正10)年10月に山岳雑誌『草鞋』を創刊している。創刊号は、当時の部長が矢澤米三郎講師(松本女子師範学校長・信濃山岳会長)だったこともあり、松高山岳部員と信濃山岳会員の有志の集まりでつくった「原人社」という組織が発行し、第2号から『わらぢ』として第4号まで続いた。

しばらく休刊し、松本高等学校山岳部が1927(昭和2)年に復活の第1号を発行。その後は断続的に1946(昭和21)年の第7号(最終号)まで続いた。



『草鞋』

## 矢澤ノート 矢澤家資料

1921(大正10)年  
諏訪市博物館 蔵

1921(大正10)~1925(大正14)年頃  
の手帳。日本ノート学用品株式会社製。月  
日を記入する日記形式の書式だが、矢澤  
は記録用のフィールドノートとして使用して  
いる。内容は、女子師範で開催された専門  
家の記録や、登山に関わる記録や高山植  
物・動物の観察メモを含んでいる。



# 『信濃博物学雑誌』 創刊号

信濃博物学会発行  
1902(明治35)年  
中央図書館 蔵

矢澤が東京高等師範学校研究科修了し、長野県師範学校に帰任したことを一つの契機に、1902(明治35)年6月信濃博物学会を創立。その機関誌として同年8月創刊。雑誌は1913(大正2)年5月の39号をもって廃刊となり、信濃博物学会もこの年自然消滅している。背景に、動物学・植物学・鉱物学・地質学など、博物学を構成する各分野の研究が進展し、個々の学問領域として確立していったことも影響している。



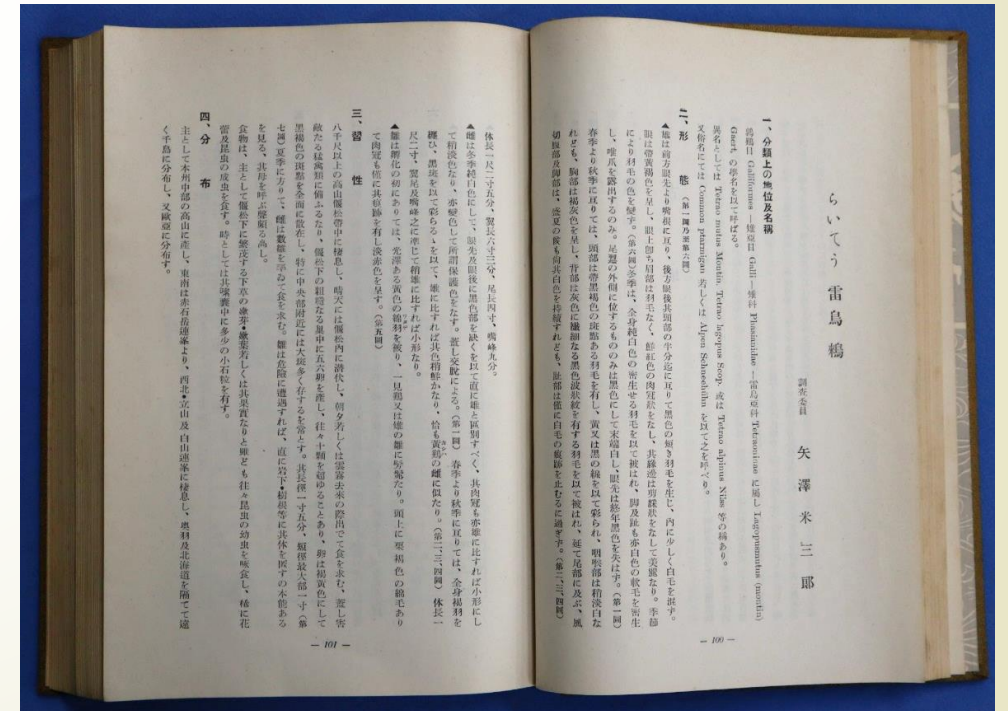
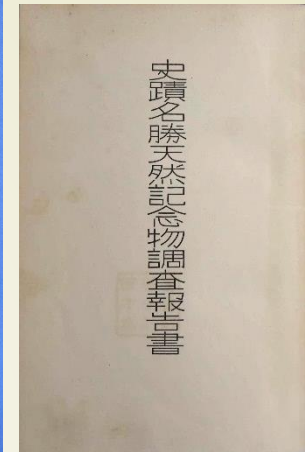
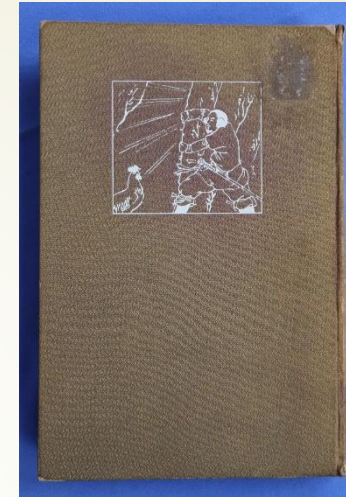
参考：『信濃博物学雑誌』第参號 雷鳥挿図（河野齡蔵画）

# 『史蹟名勝天然紀念物調査報告』

## 第1輯

長野県刊  
1923(大正12)年  
中央図書館 蔵

1919(大正12)年に史蹟名勝天然紀念物法が公布されたが、長野県は1921(大正10)年調査会を組織し調査を開始した。人文・自然科学に関する専門家を調査委員に委嘱した。自然科学の分野では矢澤米三郎をはじめ、河野齡蔵、八木貞助、千野光茂、小泉秀雄などが最初の委員となった。1913(大正12)年には調査報告の第1輯が発行されたが、矢澤は「らいてう雷鳥鶉」の項目を担当している。調査報告書は、1951(昭和26)年の第28輯まで続いた。



## 矢澤 米三郎 (やざわ よねさぶろう) (こめさぶろう)

1868 (慶応4・明治元) 年5月2日 - 1942 (昭和17) 年3月31日



日本の博物学者、教育者で、日本における博物学研究、特にライチョウ研究の先駆者として知られる。

長野県諏訪郡上金子村 (現諏訪市) の寺子屋師匠矢澤正雄の長男として生まれる。長野県尋常師範学校、東京高等師範学校 (博物科) 卒業。長野県師範学校の教諭となる。同級生の河野齡蔵らと乗鞍、白馬、ハケ岳等の植物・動物の高山学術研究に着手し、幾多の新種を発見している。

1902 (明治35) 年には信濃博物学会を結成し、『信濃博物学雑誌』を創刊。長野県における博物学の先駆けとして、教育史に名をとどめる。1905 (明治38) 年、松本女子師範学校が設立されると、校長に就任。河野を教頭に招き、日本アルプスの研究計画を立て、また秩父宮、澄宮、朝香宮、竹田宮の登山の案内説明にもあたっている。

1916 (大正5) 年の河野との共著『日本アルプス登山案内』 (岩波書店) は、学術的なガイドブックで、当時盛んになった登山者必読の文献、ベストセラーで版を重ねた。

1919 (大正8) 年に信濃山岳会が発足した際には初代会長に就任し、翌年発足の旧制松本高等学校では自然科学の講師を務めるとともに、山岳部の初代部長も務めた。

主な著書に『雷鳥』 (1929年、岩波書店)、『日本アルプスの研究』 (1935年、三省堂)、『帝国植物学提綱』 (1899年 金港堂)、『昆虫生態学』 (1903年 光風館) などがある。

1942 (昭和17) 年、神奈川県逗子町で死去。実弟に三村家の養子となった教育者三村安治 (旧姓矢澤。三村一 (みむらはじめ) 第4代信州大学長の父) がいる。

なお、矢澤米三郎に関する資料を含む矢澤家資料は、諏訪市博物館に寄贈された。

## 河野齡蔵(こうの れいぞう)

1865(元治2)年~1939(昭和14)年



日本の博物学者、教育者で、博物学研究、特に高山植物研究で知られ、特に山岳写真の分野では日本における先駆者として知られる。矢澤米三郎と共同で高山帯の動植物の研究を担った。

信濃国安曇郡犬飼新田村(現長野県松本市島内)の庄屋を務めた河野通重の四男として生まれる。

1889(明治22)年長野県師範学校卒業、上水内学校訓導を命ぜられる。矢澤米三郎は同級生。1890(明治23)年に北安曇高等小学校訓導に転任し、以後県内の小学校、高等女学校を経て、1905(明治38)年松本女子師範学校の創立にあたり矢澤校長の元、教頭として赴任。

1892(明治25)年ころから教職の傍ら、師範学校の同級生矢澤米三郎とともに、高山植物の研究にあたり、北アルプスやハケ岳、北海道・千島列島・樺太の山に登山をし、また高山植物の研究の傍ら山岳写真を撮影。山岳に関する多くの論考を学術雑誌に掲載し、近代登山の隆盛にも貢献した。

矢澤とともに、1906(明治39)年に信濃博物学会を結成、また1919(大正8)年に信濃山岳会を発足させ副会長となる。



### 3 矢澤米三郎と 信濃博物学研究

## 矢澤米三郎 年譜

- 1868 (明治元) 年 諏訪郡上金子村 (現諏訪市) の寺子屋師匠矢澤正雄の長男として生まれる。通称米三郎、字を正臣と称す。
- 1889 (明治22) 年 長野県尋常師範学校卒業、同校訓導に任命される。東京高等師範学校に入学、在学中斉田功太郎教授の指導を受ける。
- 1893 (明治26) 年 東京高等師範学校を卒業、同時に母校長野県尋常師範学校教諭に任命される。師範学校の同級生河野齡蔵と他数名と共に学術研究のため乗鞍岳に登る。長野県における学術研究登山の始まり。
- 1893~1896 (明治26~29) 年 「長野博物学会」を創設。
- 1896 (明治29) 年 長野県尋常師範学校教諭、長野県尋常中学校教諭を兼任。
- 1898 (明治31) 年 東京高等師範学校研究科に入学。この時、校長は矢田部良吉博士。斉田功太郎博士はドイツ留学中。
- 1899 (明治32) 年 東京高等師範学校研究科に在学しながら、東京高等師範学校講師となる。『理科教授革新之着歩』(小林仙鶴堂)、『帝国植物学提綱』(金港堂)、『帝国生理学提綱』(同)を出版。
- 1900 (明治33) 年 東京高等師範学校研究科修了。長野県師範学校(校名変更)教諭に復帰する。
- 1901 (明治34) 年 『中学新植物教科書』『植物実験法』(六盟館)の他、河野齡蔵と合著で『普通理科教科書 理化学及礦物之部』(帝国通信講習会)を出版。
- 1902 (明治35) 年 興隆した高山研究の風を受けて、矢澤を幹事長に長野県師範学校内に「信濃博物学会」を結成し、『信濃博物学雑誌』を創刊する。皇太子(後の大正天皇)が長野県師範学校に行啓、その際トガクシヨウマの鉢植えを台覧に供する。後に東宮御所に献納。戸隠山で田中貢一とヒメスミレサイシン※を採集。  
※1900(明治33)年に戸隠山で田中貢一が発見。
- 1903 (明治36) 年 野尻湖でヒメミズニラを発見。澤田和義と合著で『昆虫生態学』(光風館)を出版。
- 1904 (明治37) 年 戸隠山でトガクシデンダを発見。

- 1905 (明治38) 年 長野県は師範学校女子部を独立させて松本女子師範学校を創設。矢澤が校長に任命される。教頭に河野齡蔵を迎える。
- 1907 (明治40) 年 八ヶ岳で高山植物研究会を実地。会長矢澤米三郎、講師牧野富太郎。河野齡蔵がこの会の企画・運営の責任者。
- 1911 (明治44) 年 「信濃山岳研究会」を創設し、会長に就任。1919(大正8)年「信濃山岳会」と改名。この会は、1944(昭和19)年戦時統制のため解散。ライチョウが保護鳥に指定され、狩猟禁止となる。
- 1916 (大正5) 年 『日本アルプス登山案内』(岩波書店)を河野齡蔵と共著で出版。
- 1917 (大正6) 年 松本女子師範学校で火災発生。本校舎の殆ど(建物10棟)が焼失。標本も失われた。
- 1919 (大正8) 年 松本高等学校設立、講師に就任。松本女子師範学校校長兼任。
- 1921 (大正10) 年 朝香宮の立山・剣岳縦走に随行する。その時のメモが『矢澤ノート』として残されている。松本高等学校山岳部誌『草鞋』創刊号発行。山岳部初代部長として発行所感が掲載される。
- 1923 (大正12) 年 ライチョウが天然記念物に指定される。秩父宮の北アルプス縦走に随行する。
- 1924 (大正13) 年 川合訓導事件を前に、長崎県師範学校校長に転任を命ぜられ、10月退職して松本に帰る。同年9月に川合訓導事件。
- 1925 (大正14) 年 竹田宮、山階宮の北アルプス縦走に随行する。岩波茂雄、酒井由郎と北アルプス連峰を縦走する。
- 1927 (昭和2) 年 『鳥獣虫魚』(古今書院)を出版。
- 1928 (昭和3) 年 『上高地』(岩波書店)を出版。
- 1929 (昭和4) 年 『雷鳥』(岩波書店)、『信濃天然記念物』(信濃郷土文化普及会)を出版。松本市袋町に新居を構える。
- 1932 (昭和7) 年 信濃博物会会長に就任。1942年まで務める。
- 1935 (昭和10) 年 『日本アルプスの研究』(三省堂)を出版。
- 1936 (昭和11) 年 神奈川県逗子町に転居。
- 1942 (昭和17) 年 逗子町で死去。享年74歳。墓所は諏訪市(旧諏訪郡中洲村)

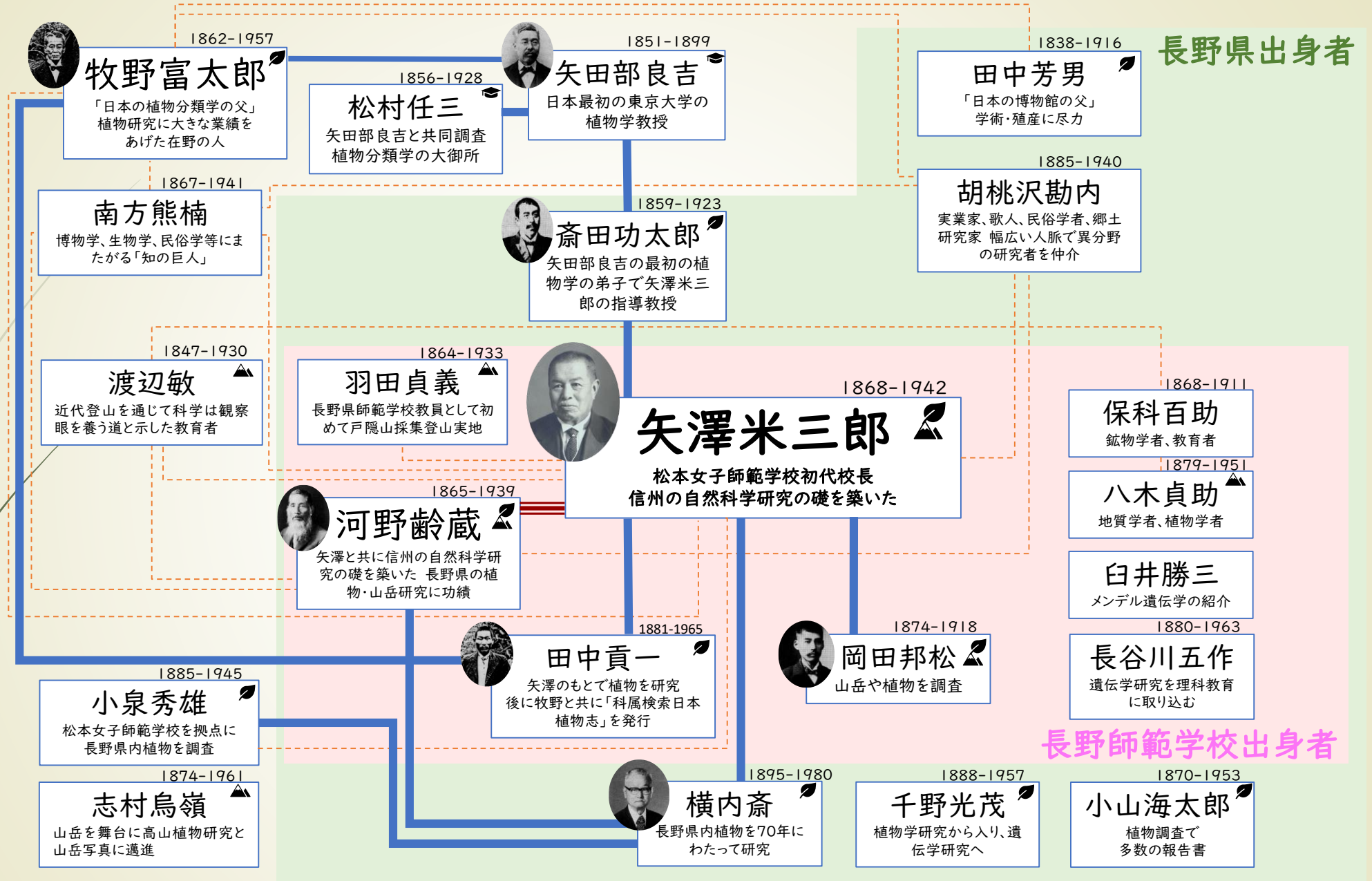


### 3 矢澤米三郎と 信濃博物学研究

- 1 1868年諏訪市中洲出身 長野県師範学校(松本→長野)に進学
- 2 1889年長野県尋常師範学校卒業 東京高等師範学校に進学
- 3 1893年東京高等師範学校卒業 長野県尋常師範学校教諭に任命
- 4 1905年松本女子師範学校初代校長に任命
- 5 1924年長崎県師範学校校長に任命
- 6 1924年退官後も研究を続ける
- 7 1936年療養のため神奈川県逗子町に転居 1942年死去
- 8 生地である諏訪市中洲を墓所とする。



3 矢澤米三郎と信濃博物学研究



— 直系師弟関係  
- - - 影響を受けた関係  
▲ 山岳研究関係  
🌿 植物研究関係  
🎓 帝国大学教授

矢澤米三郎の人的ネットワーク

# 米三郎は よねさぶろう? こめさぶろう?

従来、矢澤米三郎の名は「やざわよねさぶろう」として周知されてきた。しかし展示している『矢澤ノート』の調査段階でノートの裏表紙に「K. Yazawa」とイニシャルを矢澤本人が記していることがわかった。そこで「こめさぶろう」が矢澤米三郎の本来の読み方である可能性がでてきた。日本国内で発行されている書籍、新聞等には明治から平成にかけて「やざわよねさぶろう」とルビがふられている。

1902年に発行された『植物学雑誌／The Botanical Magazine』16巻186號に牧野富太郎が英語で執筆した報告書『Observations on the Flora of Japan』が掲載され、そこでヒメスマレサイシン／*Viola yazawana* Makinoが紹介された。学名は牧野が命名しており、*yazawana*は矢澤への献名である。この報告書で牧野は矢澤をMr.Komesaburō Yazawaと紹介している。前年発行の15巻でも、牧野は矢澤をMr.Komesaburō Yazawaと記載している。世間一般には「よねさぶろう」が通称となっていたが、矢澤本人の自認は「こめさぶろう」であり、知人にはそう名乗っていた可能性があるかと推測される。



↑『矢澤ノート』に記された「K.Yazawa」のイニシャル

牧野富太郎の報告書『[Observations on the Flora of Japan](#)』に記載された「Mr.Komesaburō Yazawa」→

158

BOTANICAL MAGAZINE.

[V. 4. XVI.]

*Viola* (Nominum) *Yazawana* Makino sp. nov.

Acaulescent; rhizome erect or ascending, thick, pale, closely articulated, covered with brown old petiole-bases and old stipules, rooting throughout, 1½-3 cm. long; roots slender, white, with loose and short rootlets. Leaves few to several, erect, or ascending, deltoid-cordate, acuminate with a mucronato-acute tip, auriculate with an open deep sinus and ovate or ovato-rounded lobes at the base, depressed-crenato-serrate, membranaceous, clearly green, yellowish-iridescent when dried, not variegated, colorous, thinly pubescent above, glabrous beneath, with loose veins, 3½-7½ cm. long, 3-6 cm. broad after anthesis; petiole longer than the blade, slender, exalate, glabrous, attaining 11 cm. long after anthesis, pale-green, but purplish below; stipules subulato-linear, narrowly attenuated above, adnate at the base, membranaceous, pale, luxly glanduloso-ciliated on the margin, 6-8 mm. long. Peduncle about 1 to a stem, very slightly exceeding the leaves in height, gracile, glabrous, pale-green, 5½-7½ cm. long, bracteate above the middle; bracts 2, approximate, linear, acutish, one-nerved, few-glandular on the basal margin, about 4 mm. long. Flower white, about 1½ cm. across. Sepals lanceolate, or broadly lanceolate, acutish, glabrous, green, narrowly hyaline-margined, with 3 main nerves and very loose veinlets, 5-6 mm. long; basal auricles short and truncate, entire, glabrous. Petals obovato-elliptical, rounded at the apex, but retuse in the lower one, attenuated towards the base, beardless, 10-12 mm. long, 5-6½ mm. wide; calcar very short, small, scutiform, 3 mm. long and broad. Connective-tip rounded-ovate, obtuse, a little shorter than the anther-cells; appendages thick, curved, shortly imbrato-falcate, with an obtuse tip, about 2 mm. long. Ovary conical, acute, glabrous; style slightly exerted above the anther, clavato-cylindrical, glabrous; stigma subovate, with a very short beak. Capsule oblong-elliptical, acutish, longer than the persistent sepals, glabrous, maculate with purple, about 8 mm. long.

*Hab.* Prov. SHINANO: Mt. Togakushi (K. Matsukata! July 1901; K. Tazawa! May 1902).

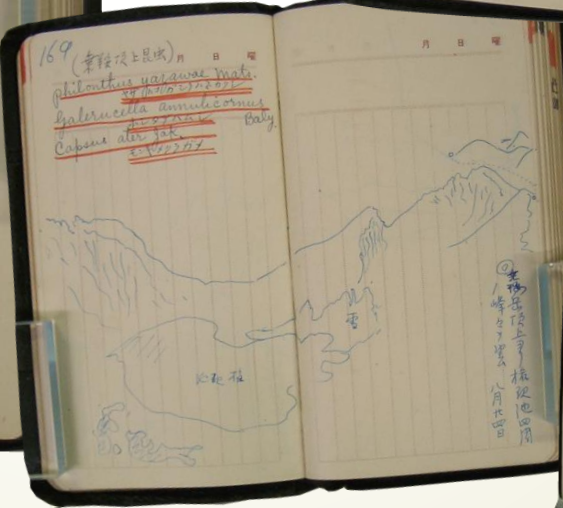
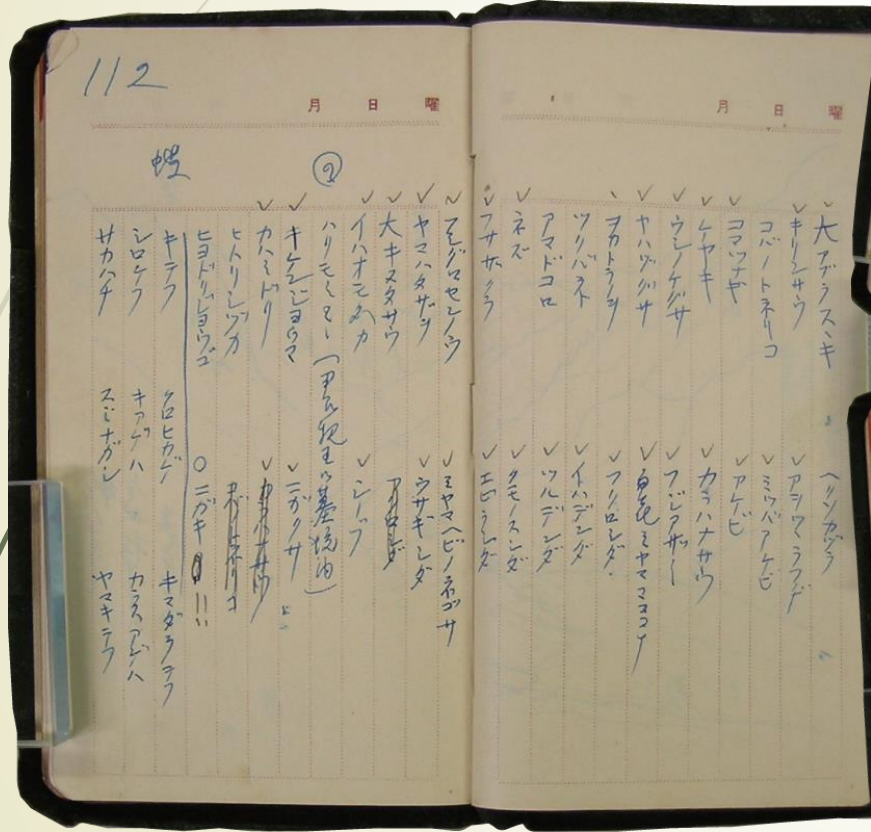
A rare species; it should be grouped with *Viola virgata* Maxim. and *V. Matsumurae* Makino, but it is smaller.

I have named it in honour of Mr. Komesaburō Yazawa, Professor in the Nagano Normal School in prov. Shinano.

*Viola variegata* Fisch.; Spreng. Syst. Veg. I. p. 797; Reop. et Schultk. Syst. Veg. V. p. 392; DC. Prodr. I. p. 293; Ledeb. Fl. Ross. I. p. 244; Bunge Enum. Pl. China boreal. p. 7; Maxim. Prim. Fl. Amur. p. 48; Id.

※通常、生物の学名を誰かに献名する場合、「姓(や名)+i(男性の場合)」や「姓(や名)+ae(女性の場合)」と表記される。また、種小名を形容詞化したラテン語的に表現することもでき、*Viola* が女性形の名詞であるため、種小名も女性形に語尾変換し、*yazawana* とされている。ちなみに、属名が男性形であれば *yazawanus* に、中性形であれば *yazawanum* となる。

# 『矢澤ノート』より ～植物・昆虫・スケッチ編～



# 牧野富太郎書簡(矢澤宛) 大正7年

1918(大正7)年  
諏訪市博物館 蔵

牧野が矢澤宛にタカネマンテマの標本を送るよう要望したハガキ。タカネマンテマは矢澤の教え子岡田邦松が発見した新種で、牧野は矢澤を通じて標本を入手しようとしたと思われる。このはがきの直後に牧野は岡田にハガキを送り、標本の借用を依頼している。



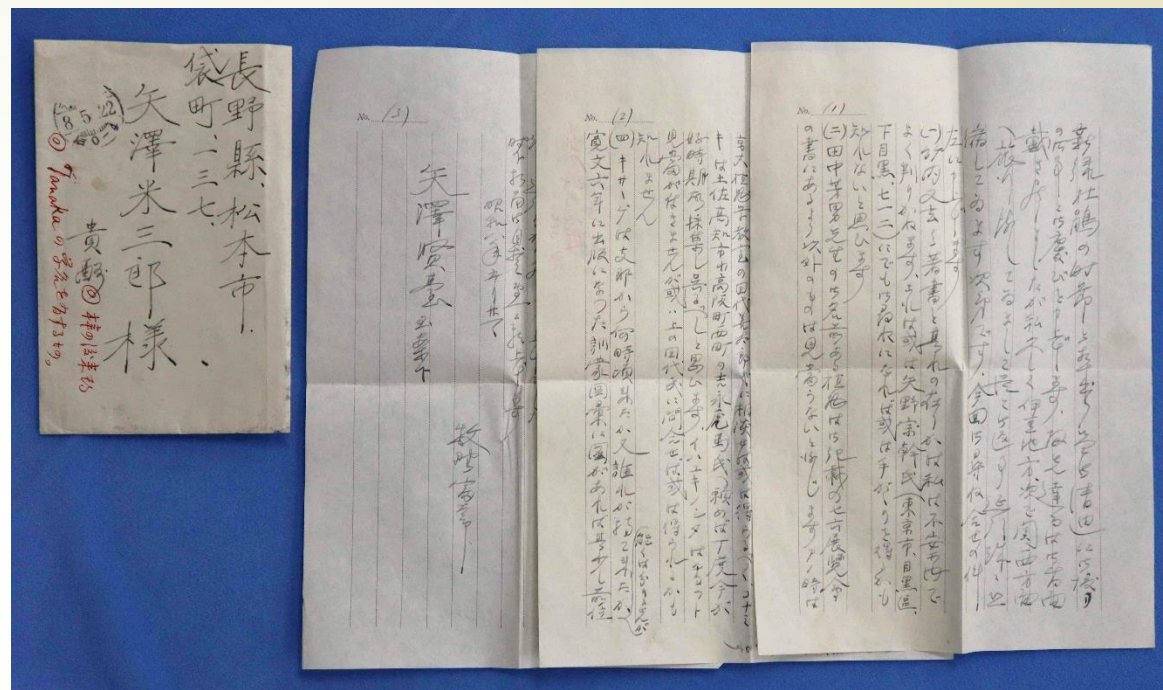
はがき  
牧野富太郎から矢澤米三郎へ  
1918(大正7)年1月6日  
拝啓、然れば彼のタカネマンテマの標品御持ち合せニ相成居られ候へ者一二個至急ニ御惠贈ニ預度。此段懇願之至ニ不他候、先ハ右御相談まで、如此御坐候  
恐々頓首  
大正七年一月六日  
拝啓、さういふことですので、かのタカネマンテマの標本をお持ちでしたら、1個か2個至急いたさたく、お願いいたします。まずは右相談いたします

3 矢澤米三郎と  
信濃博物学研究

# 牧野富太郎書簡(矢澤宛)

1933(昭和8)年  
諏訪市博物館 蔵

この書簡以前に矢澤から牧野に4点にわたる質問の書簡が送られていたらしく、一つひとつの質問に丁寧に答えている。文体は口語調。



書簡  
牧野富太郎から矢澤米三郎へ  
1933(昭和8)年5月21日

新緑社編の時節と相成り候、益御清池に御渡りの御事と御慶びを申し上げます。擬先達而は御書面載き居りましたが、私入し伊豆地方、次で関西方面へ旅行致してゐまして、従て御返事延引誠に恐縮してゐます次第です。今回御尋ね合せの件左に申し上げます。

(一) 竹内又玄の著書と其れの在りかは私には不案内でよく判りかねます。これは或は矢野宗幹氏(東京市目黒区下目黒七二)にでも御尋ねになれば或は手がかりを得るかも知れないと思ひます。

(二) 田中芳男先生の御名前ある植物は御記載の七六展覧会の書にあるより以外のものは見當らないと存じます。アノ時は

○ 思ひ出しましたが、別とRichard Tanker Okumura がありましたがこれはモネイナと同一のものす。之れをシモンチナチナすのは當つてをせん。フレイチはRuhus ochotensis Koidz. ぞ。

私がありわけのものをなりました。動物の方は私には私にはありません。これは動物方面の方に御問合せを願ひます。

(三) 御要望のイハユキノシタ、コナキ、コクテンキの三種の標本は持つて居ますけれど、私の宅の標本は層々と積み重ねる等々は、皆奥の方にありて之れを譲り出すと容易ならず不得止此點は御容情に預りたいと存じます。コクテンキの標本は京大植物学教室の田代善太郎氏に相談せば或は得らるべく、コナキは土佐高知市高取町西町の吉永虎馬氏へ頼めば下度今が好時期故採集し呉べしと思ひます。イハユキノシタはチヨット見當が付きませんが或ハ上の田代氏に問合せば或は得られるかも知れません。

四) キサ、ケは支那から何時頃来たか又誰れが持つてきたか能くは分かりませんが寛文六年に出版になつた訓蒙図彙に因があれば其少し前位の所ではないかと思はれます。之れをアツサと云ふのは其漢名が厄をなして日本來のアツサを此樹だと誤認したから起つた事と存じます。例卒其辺悪からず思召を願ひあげます。

誠に延引ながら右まで申し上げます。

時下折角御自愛毎一に願ひ申し上げます。

昭和八年五月廿一日  
牧野富太郎

矢澤賢台 玉案下

1933年5月以候、矢澤米三郎は牧野富太郎に4点にわたる質問の書簡を送つた。これに対し牧野は、伊豆や関西への旅行で返事が遅れたことをわびつつ、4点の質問に回答している。

(注) はがき、書簡の解説については後藤芳孝氏のご教示を得ました。

## 矢澤米三郎の主な著作

- 『日本アルプス登山案内』 1916(大正5)年 岩波書店  
河野齡蔵と共著
- 『日本アルプスの研究』 1935(昭和10)年 三省堂
- 『雷鳥』 1929(昭和4)年 岩波書店
- 『信濃天然記念物』 1929(昭和4)年 信濃郷土文化普及会
- 『帝国生理学提綱 全』 1899(明治32)年 金港堂

矢澤は10冊を超える著書と、100篇に及ぶ論文を残している。研究分野は広範に及び、動植物・鉱物を対象とする博物学の時代を反映した仕事ぶりである。

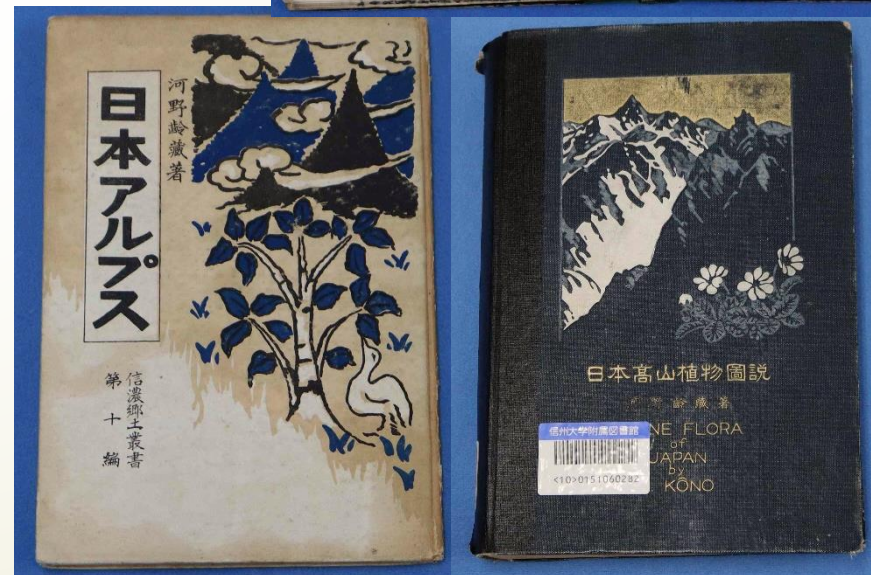




# 河野齡蔵の主な著作

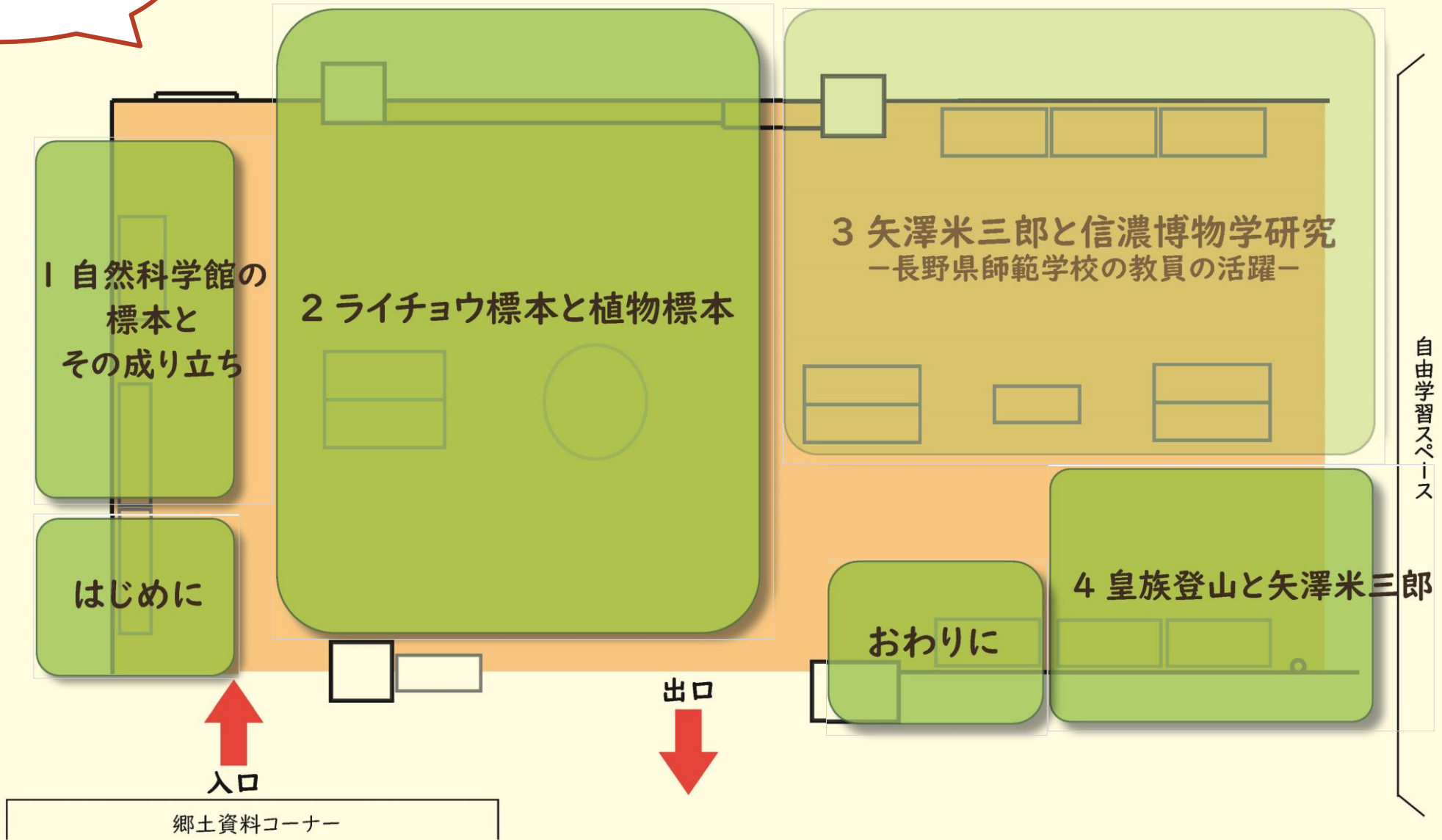
- 『高山植物の研究』 1917(大正6)年 岩波書店
- 『高山研究』 1927(昭和2)年 岩波書店
- 『日本アルプス』 1929(昭和4)年 信濃郷土文化普及会
- 『日本高山植物図説』 1931(昭和6)年 朋文堂

長野県師範学校の同級生であった河野齡蔵と矢澤米三郎は、明治から大正時代にかけて、高山に生息する動植物について、共同で山行し、採集して標本をつくる活動を共にしたが、晩年に至り、高山植物に焦点をあてた研究に力を入れた。



# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



## 4 皇族登山と矢澤米三郎

1921（大正10）年夏、朝香宮鳩彦王の立山剣縦走に際し案内役を務めた矢澤は、そのようすを手帳に記しました。そこからは矢澤の鋭い観察眼をみることができます。



# 矢澤ノート 矢澤家資料

1921(大正10)年  
諏訪市博物館 蔵

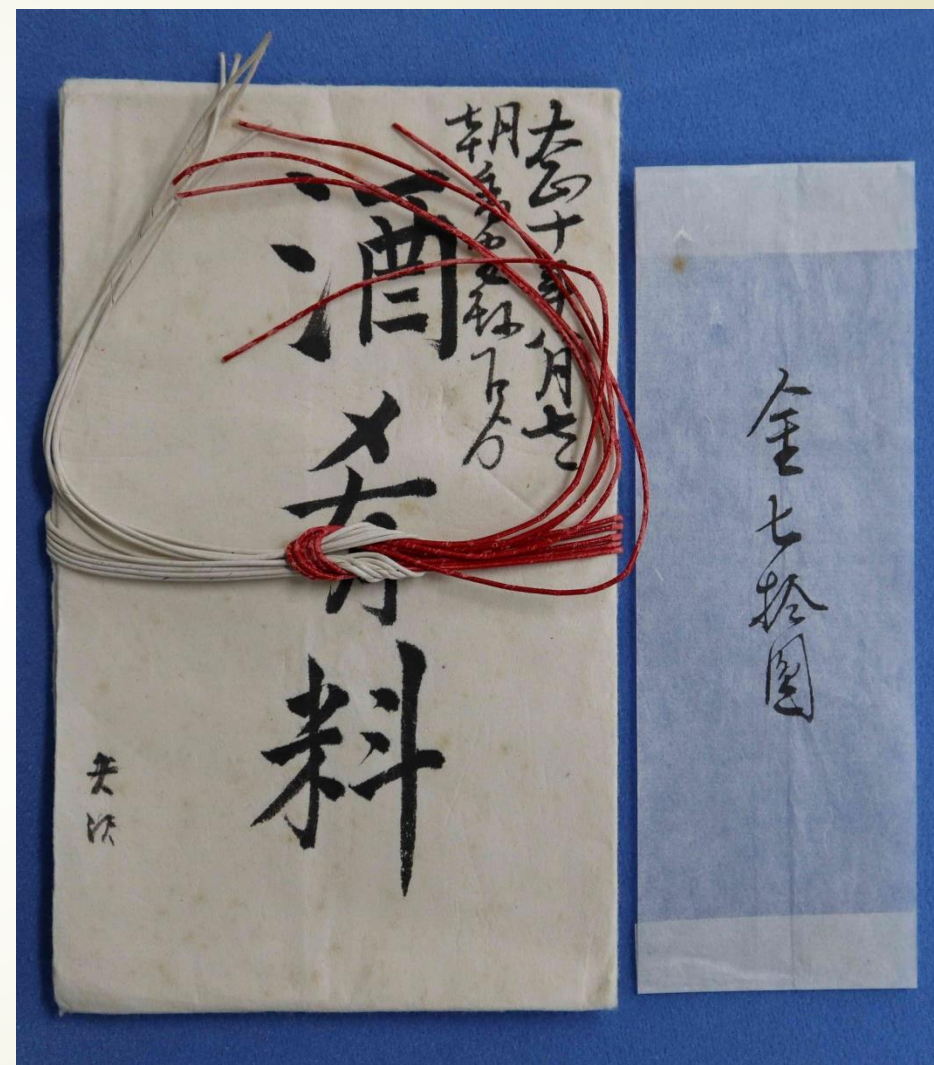
1921(大正10)年~1925(大正14)年頃の手帳。日本ノート学用品株式会社製。月日を記入する日記形式の書式だが、矢澤は記録用のフィールドノートとして使用している。内容は、松本女子師範学校で開催された専門家の記録や、登山に関わる記録や高山植物・動物の観察メモを含んでいる。特に1921(大正10)年7月末から8月初旬に行われた、朝香宮鳩彦王の登山に随行した際の記録は貴重である。



## 祝儀袋

1921(大正10)年8月7日  
諏訪市博物館 蔵

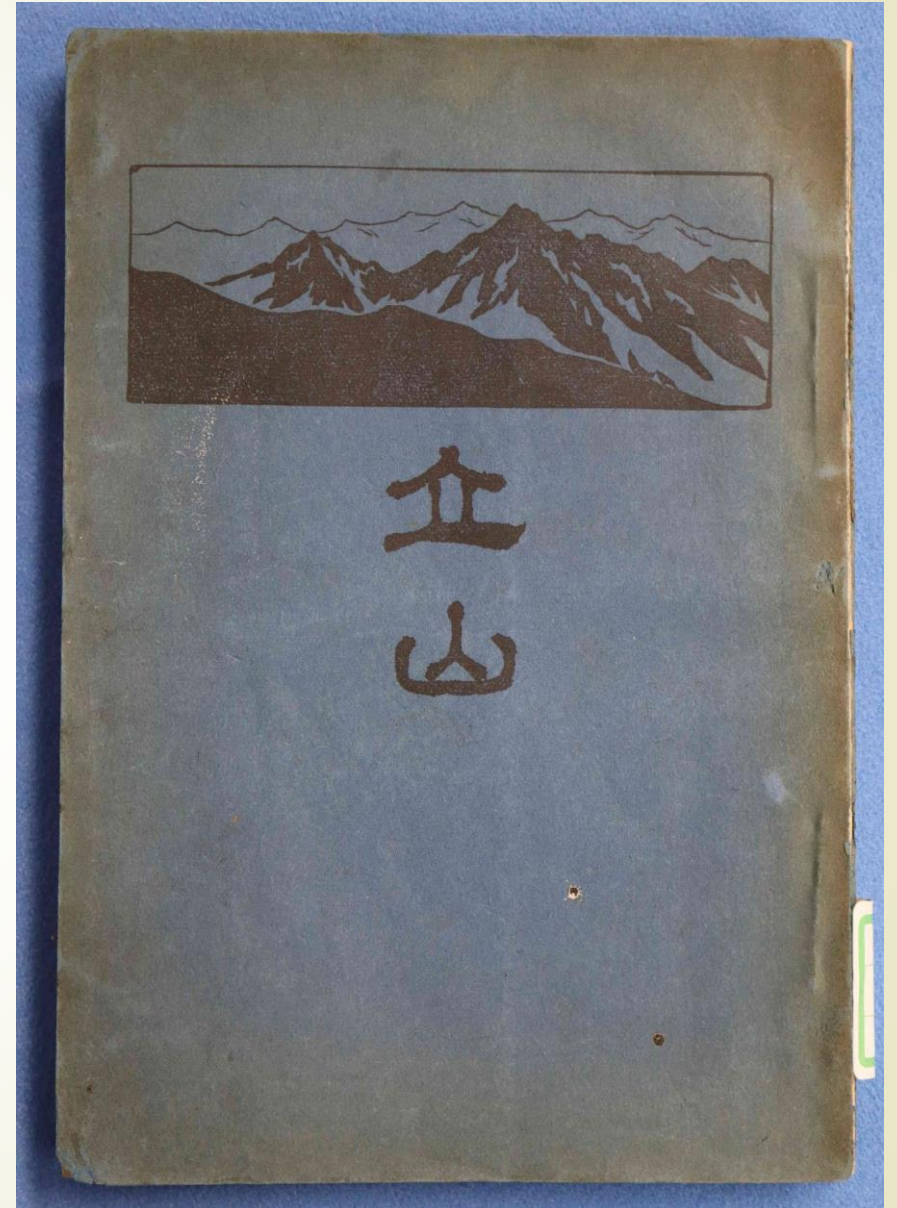
立山・剣縦走の案内に対し御礼の「酒肴料」として「金七拾圓」が「朝香宮殿下より」矢澤米三郎に渡されたことがわかる。  
8月7日は全行程の最終日にあたる。



# 『立山』

吉澤庄作 著  
1925(大正14)年  
中央図書館 蔵

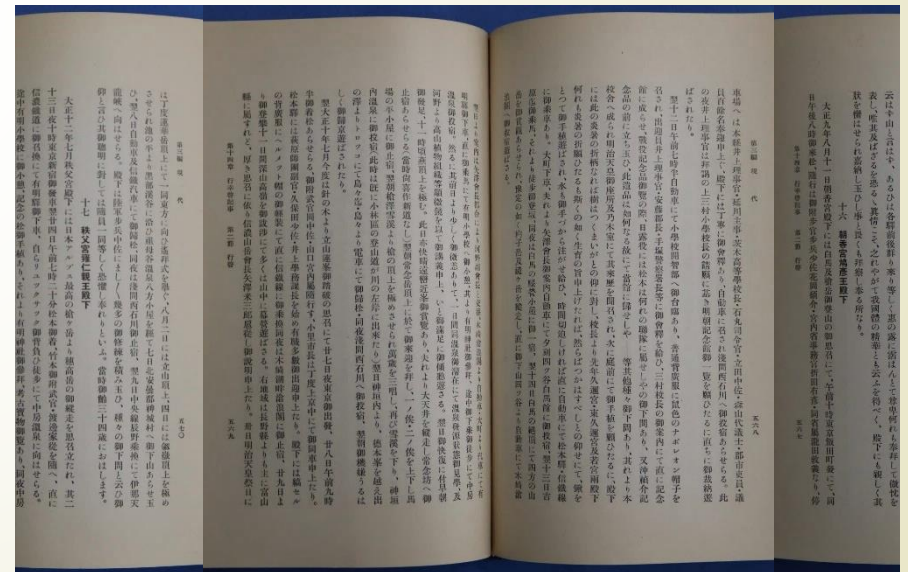
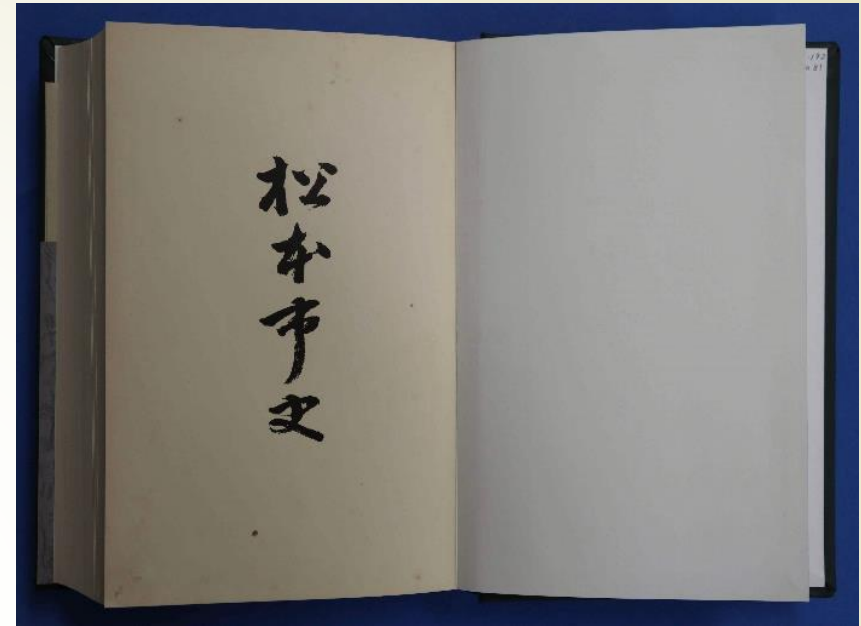
富山県の教育者・博物学者・登山家・俳人でもあった吉澤庄作(1872~1956)が1925(大正14)年に出版した立山に関する総合的な案内書。総説・地形・特殊地形美=名勝、地質、気象、動物、植物、鉱物、交通ほか人文・自然科学全般にわたって記述される。とりわけ、吉澤が皇族の立山登山の案内をした記録は貴重で、朝香宮の山行の詳しい記録も収録されている。



# 『松本市史』上巻・下巻

1935(昭和10)年  
中央図書館 蔵

明治30年代半ばの松本町時代から歴史編纂の計画が起こり、紆余曲折をへて上下2巻として完成した。下巻の行幸啓記事のなかには、朝香宮鳩彦王のアルプス登山に関する記録が含まれ、山行の復元の資料となっている。



4 皇族登山と  
矢澤米三郎

# 1921 (大正 10) 年 7 月 ~ 8 月 朝香宮立山剣縦走

## 行程表

日程	月日	行動内容 (立山博物館『宮様山へ』p34)	矢澤ノート	『松本市史』p569~
第1日	7月27日	新宿駅発		夜東京御出発
第2日	7月28日	北安曇郡木崎湖畔浪浪泊	7月28日御登山一行(参加者名)	午前9時半松本着。信鉄線乗換。夜木崎湖畔浪浪泊止宿。
第3日	7月29日	早朝自動車にて北安曇郡役所記念館へ。休憩後徒歩で大澤小屋へ。 大澤小屋泊。(一行は50余名)	午前9時5分前御出発。午後4時半御着(大澤小屋)	
第4日	7月30日	7時30分頃針ノ木峠大雪渓登攀。蓮華岳登攀。午後4時南澤小屋到着。天幕泊。	南澤露营地において浄土山東峰を望む(展望スケッチ、露营地図)、蓮華岳遥拝園(雷鳥の図)	明治天皇祭には蓮華岳頂上にて一同東方に向日遥拝式を挙げる。
第5日	7月31日	黒部川跋涉。平ノ小屋で休憩。劫安坂を登り上中ノ谷、佐良峠。午後4時頃五色ヶ原着。天幕泊。(立山温泉主加藤金治郎餅を献上。)	劫安峠頂上からのスケッチ 五色ヶ原露营地の図(高山植物)	
第6日	8月1日	午前7時半出発。佐良峠・鬼ヶ岳・龍王岳を縦走して浄土山へ。午後1時室着。地獄谷・ミクリガ池等跋涉。新築の測候所泊。	五色ヶ原東望 鬼ヶ岳頂上東望 室室前より雄山カールを望む 立山カール	
第7日	8月2日	午前6時40分出発。雄山頂上で参拝。大汝・真砂・別山縦走。午後3時頃麓に到着。天幕泊。(午後から小雨。のち一晩中豪雨)	午前6時50分に出発。午後1時半別山麓御着 雄山頂上にて記念撮影あらせらる 午後3時より大雷雨 夜中12時比目見の浸水のため御移座 (テント内配置図など)(雷鳥記事、カール分布図)など	立山頂上を極める
第8日	8月3日	朝から雨止まず。終日ほとんど晴れ間なく夜に至る。夜半ようやく晴れる	義勇士。午後4時半別山北谷出発。室室に望む 古畑一郎、丸山三郎、丸山徳司、柳井巡査、玉井口次郎	
第9日	8月4日	剣澤・長治郎谷・剣岳へ。午後剣澤南又、北又、小窓下方の大雪山を下る。池平揮水船館(モリブデン)山麓坑小屋泊。	剣ヶ岳登攀(ノート97~106までスケッチ、メモ) 登り2時35分 殿下2時25分、下り1時35分 殿下25分 雪渓上り2時5分 下り1時35分 11時10分前下り御着 雪渓の入口へ	
第10日	8月5日	午前6時池平出発。小黒部、猿飛。午後4時祖母谷温泉着。天幕泊。	池ノ平船山発、小黒部下りは危険多し	4日、剣岳頂上を極める (池の平より黒部深谷に沿い、祖母谷温泉、八方小屋を経て、7日北安曇郡神城村へ下山。翌8日自動車及び信鉄汽車にて松本へ。同夜浅間西石川止宿。翌9日中央線長野乗換にて伊那天竜峡へ向かう)
第11日	8月6日	祖母谷出発。大黒山にて昼食。大黒小屋と称する石室にて宿泊。	祖母谷温泉発。11時頃雲間剣岳及び別山山頂を見る 0時半大黒山に到着し午炊。1時半出発。3時25分八方小屋着	
第12日	8月7日	唐松岳より八方ノ池に出て神城村着。村長宅にてジャンパンで乾杯。 松本を経て浅間温泉へ。浅間温泉泊。	6時八方小屋発。花畑を見る。八方池より白馬連山を見 又戸隠妙高飯糰斑尾 浅間立料八岳富士東杓子岳白峰連峰を見る。11時神城村役場着。12時御出発。1時大町着。2時52分特別車にて御出発。4時17分北松本着	

## 7月28日 御登山一行

朝香宮康彦王殿下  
歩兵中佐 岡 碩人  
宮内属 山口健一郎  
女子師範校長 矢澤米三郎  
長野県衛生主事 延川 靖

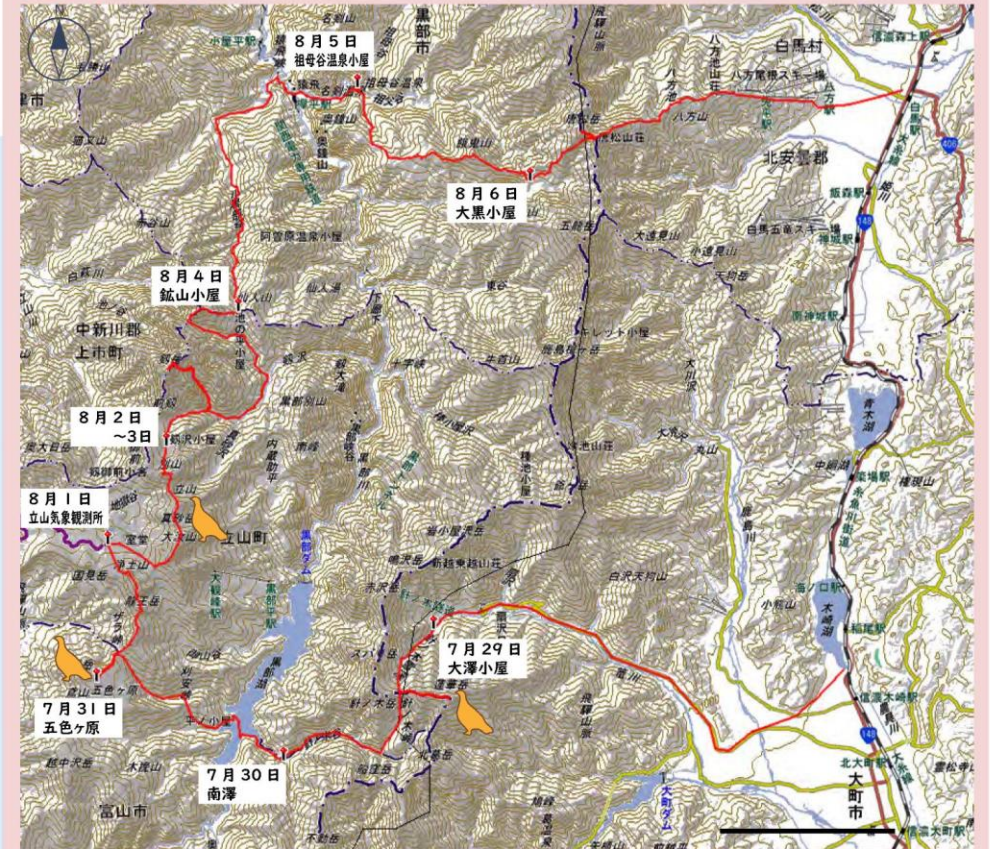
林区署長 高橋作次  
都書記 宮澤静章  
警部補 西原佐太郎  
田塚順一郎  
北安曇部長 大久保幸次郎  
長野県学務課長 井上 英

(富山県側)  
林務課長→近藤技師  
吉澤庄作教諭

◎伊東菊十 (人夫頭)  
○吉澤米次郎  
◎船山亮二  
○松倉政治  
○山田省治  
西沢国一  
郷澤然吉  
倉科知恵  
外 22 人 合計 30 名

東京朝日大内修伍  
萬朝 東京日日 赤地幸亨  
◎高岡新報 鈴木傳二郎  
報知 佐々木丑口○  
日本写真通信 辻村英三  
時事新報 人見直善  
日曜画報 三浦寅吉  
大阪毎日 大井千尋  
中外通信 端山俊雄  
信濃日報 服部一次郎  
武田録次郎

## 登山ルート



出典：国土地理院「地理院地図」



登山の途中で矢澤がライチョウを見かけた場所

宿泊場所



御恩召 (朝香宮の言葉)  
「雷鳥ノ雛ハ可愛相ナリ」(ライチョウの雛はかわいいなあ)



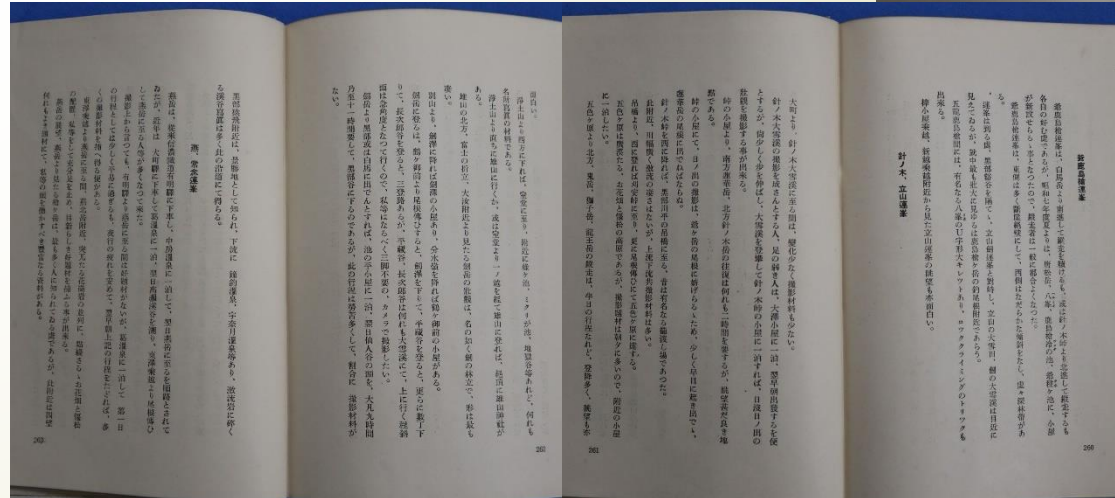
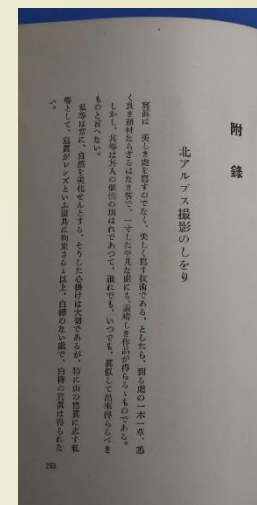
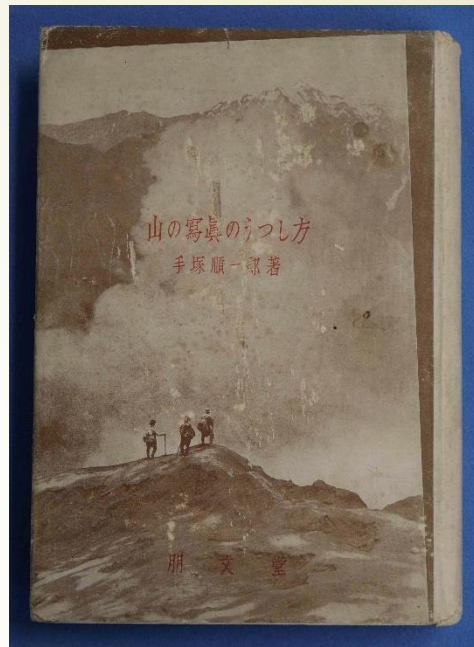
8月3日 宿泊場所のテント配置図  
矢澤らの位置と浸水被害の様子が描かれている



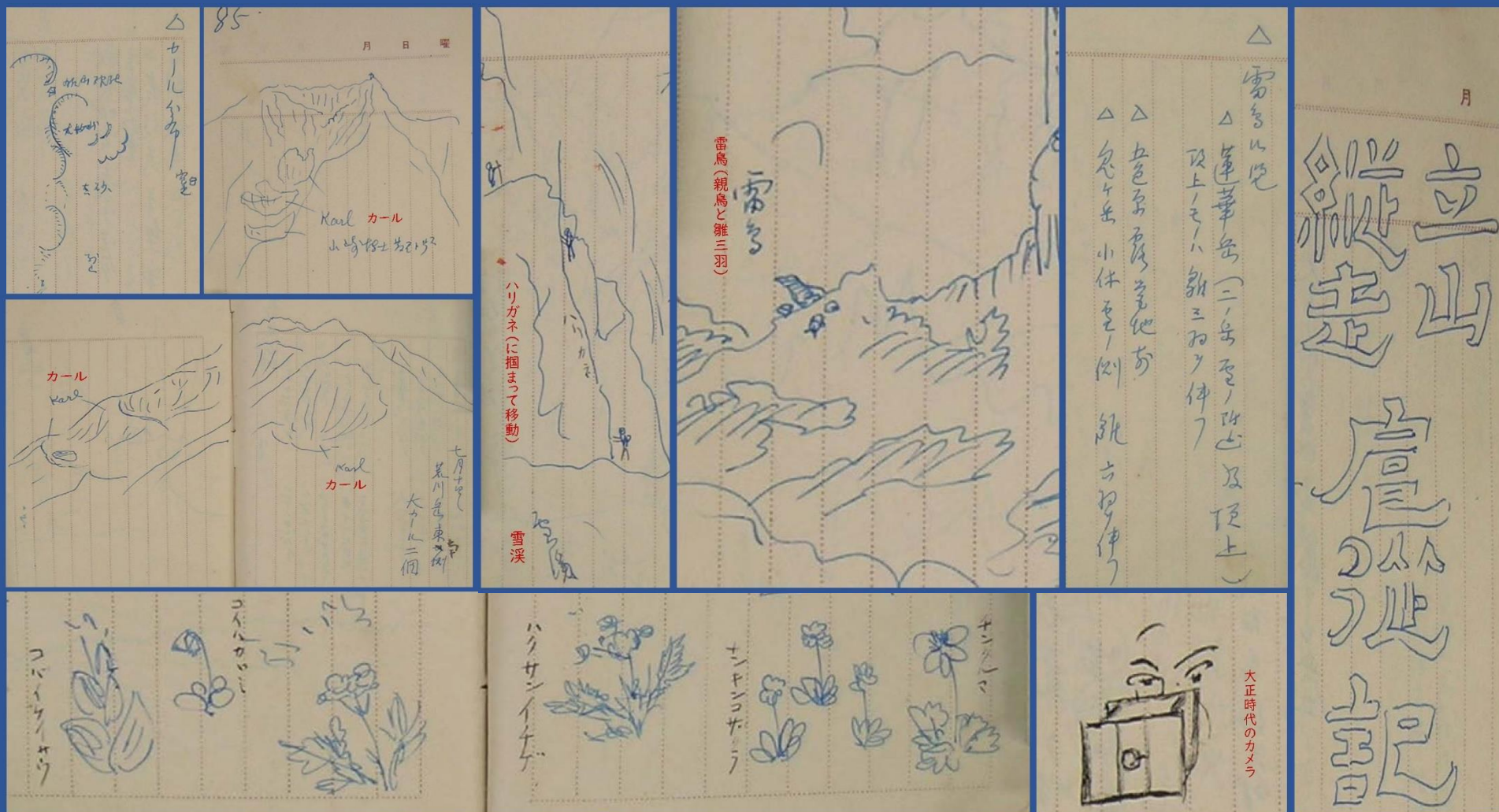
# 『山の写真のうっし方』

手塚順一郎 著  
1932(昭和7)年  
個人蔵

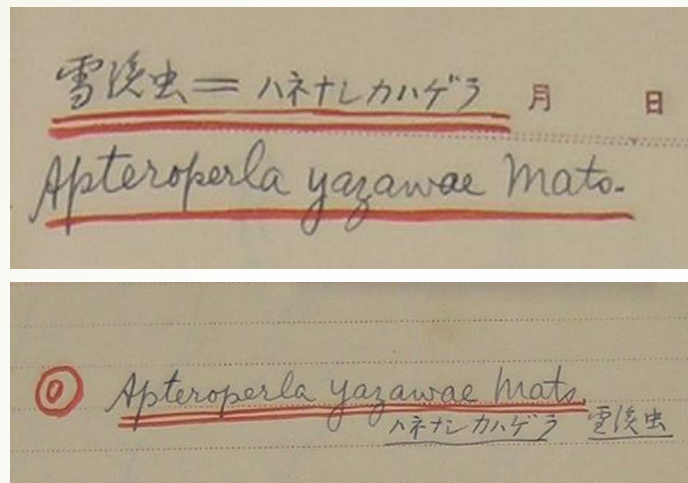
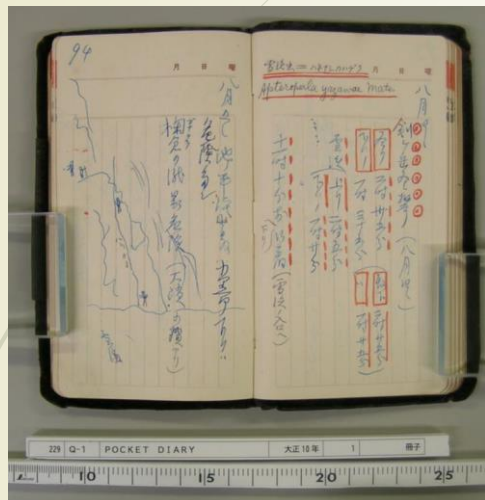
手塚順一郎(1884~1932)は大町に生まれた山岳写真家。本書は日本初の本格的な山岳写真の手引書である。1920(大正9)年、1921(大正10)年の朝香宮鳩彦王の槍・穂高、立山・剣の山行に同行し、写真撮影を担当していて、その時の写真が現在まで伝えられている。



# 『矢澤ノート』より 1921(大正10)年立山縦走時のスケッチ抜粋



# 朝香宮立山縦走時に矢澤米三郎が 発見した新種「ハネナシカワゲラ」



1921年8月4日、朝香宮鳩彦王ご一行の立山縦走時にはセツケイカワゲラ(雪渓禿翅)類の新属・新種を発見しており、後の1931年に松村松年により「ハネナシカワゲラ *Apteroperla yazawai* Matsumura, 1931」として新種記載されている。今回展示している『矢澤ノート』には「*Apteroperla yazawae* Mats.」として記され、朱下線が引かれている。学名が付されるのは新種記載のタイミングとなるので、この記述は松村とのやり取りの後に追加された記述ではないかと思われる。実際に新種記載された時の種小名「*yazawai*」ではなく「*yazawae*」と書き込まれていることも興味深い。「姓+ae」は女性に献名する場合の表記(姓が“a”で終わる場合には、aを重ねずに省略される場合も多い)で、男性への献名時には「姓+i」と表記される。

**Plecoptera** Plecoptera Species File (Version 5.05.0)

Home Search Taxa Key Help Wiki

Taxa hierarchy Change items displayed

Species File

This is your first entry to the "Taxa hierarchy" display. You can modify these specifications at any time by clicking the "Change items displayed" button in the header.

Note: If you want your changes to be preserved for future sessions, you should login. To do this, click on the logo in the upper left corner.

- superfamily *Nemourioidea* Billberg, 1820
- family *Capniidae* Banks, 1900
- genus *Apteroperla* Matsumura, 1931

species ***Apteroperla yazawai* Matsumura, 1931**

urn:lsid:Plecoptera.speciesfile.org:TaxonName:5124

Distribution: Japan.

Ecology: Freshwater, terrestrial. Shredders of decayed tree leaves

Specimen records are available.

Citations (5):

- Matsumura, 1931. 6000 Illustrated Insects of the Japan Empire Tokyo-shoin, Tokyo. [English and Japanese]. 1426 >> *Apteroperla yazawai* urn:lsid:Plecoptera.speciesfile.org:TaxonName:5124
- Illies, 1966. Das Tierreich 82:464 >> Note: nomen dubium
- Shimizu, 1997. Jap. J. Entomol. 65(3):534 >> *Apteroperla yazawai*
- Shimizu & Negoro, 2007. Bulletin of the Toyama Science Museum 30:59 >> *Apteroperla yazawai*
- Shimizu, 2016. Illiesia 12:29 >> *Apteroperla yazawai*

Type specimen information:

- Type locality: Asia-Temperate, Eastern Asia, Japan, Tateyama, Tsurugigatake, Yazawa
- Kind of type: lectotype
- Specimen category: Female
- Location of type: EIHU Hokkaido

これは、カワゲラ目昆虫の分類学的チェックリストを示したものである。

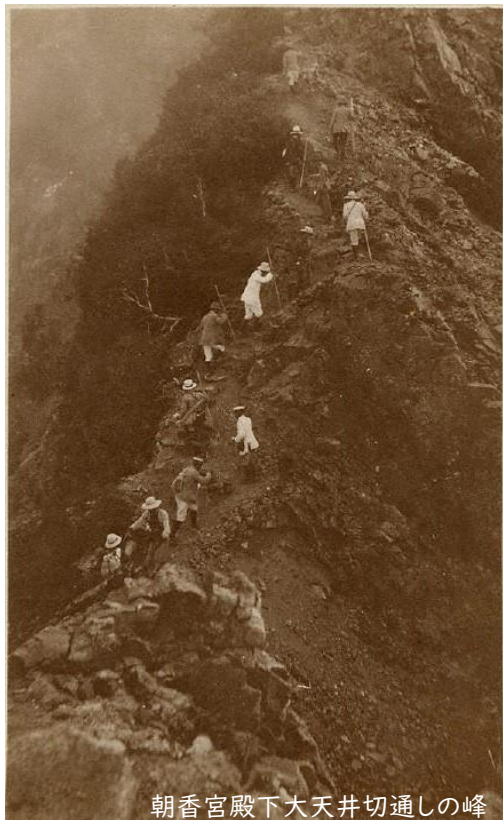
この種名(学名)のもとになった標本は矢澤によって立山・剣岳で採集され、タイプ標本は北海道大学博物館に収蔵されていることが記されている。Lectotype(後基準標本)が指定されていることから、複数の標本が同時に採集されていて、どの個体がタイプ標本であるのかの指定がされなかったために、後になってからタイプ指定がなされたと読み取ることができる。



典型的な「雪渓禿翅」類  
(写真はユキクロカワゲラ *Eocapnia nivalis*;  
富塚茂和氏撮影)

山岳写真家

# 手塚順一郎撮影の 朝香宮立山剣縦走写真



朝香宮殿下大天井切通しの峰

松本市立博物館 蔵



剣岳頂上の朝香宮殿下

松本市立博物館 蔵



剣岳絶頂に立たせられたる朝香宮殿下

手塚順一郎『山の写真のうつし方』より



五色ヶ原に御露営中の朝香宮殿下

手塚順一郎『山の写真のうつし方』より



大町市に於ける朝香宮殿下

松本市立博物館 蔵

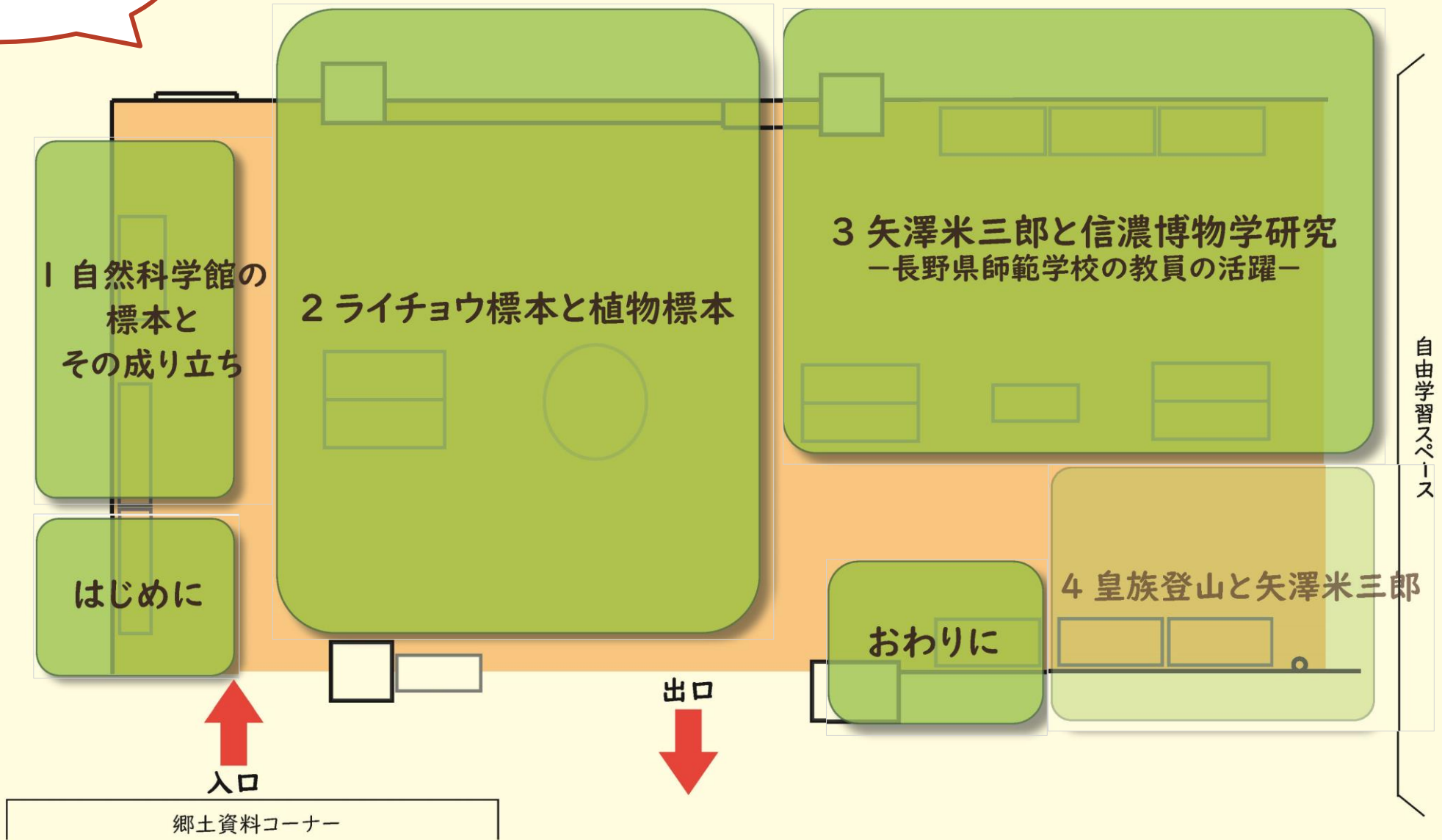


朝香宮殿下剣岳池の平

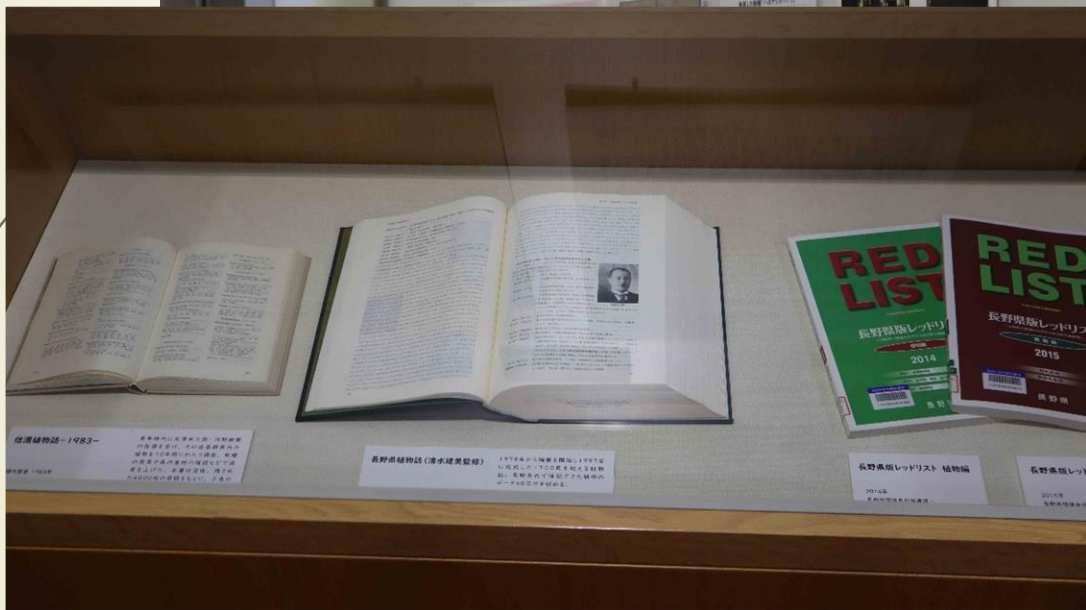
松本市立博物館 蔵

# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



おわりに



# 博物学の時代

## － 登山・写生・写真・博物・教育が複合した時代 －

信州における自然科学的な調査研究、すなわち博物学は、おもに長野県師範学校の教員や卒業生らによって明治20年代にはじめられました。

初期の研究者に渡辺敏、羽田貞義、矢澤米三郎、河野齡蔵らがおり、研究団体として信濃博物学会が1902(明治35)年に結成され、研究雑誌『信濃博物学雑誌』が研究活動を支えました。

主な研究者は師範学校の教員や卒業生、中学校の教員などであり、その中心人物が矢澤米三郎でありました。動植物、鉱物など現実に存在するあらゆる自然物を対象とした博物学を支えたのは、本草学以来の写生技術であり、近代登山の発展に合わせて山岳地の動植物にもフィールドを求め、写真技術の進展を伴いながら、大正から昭和にかけて生物学、地質学などの学問に発展していきました。

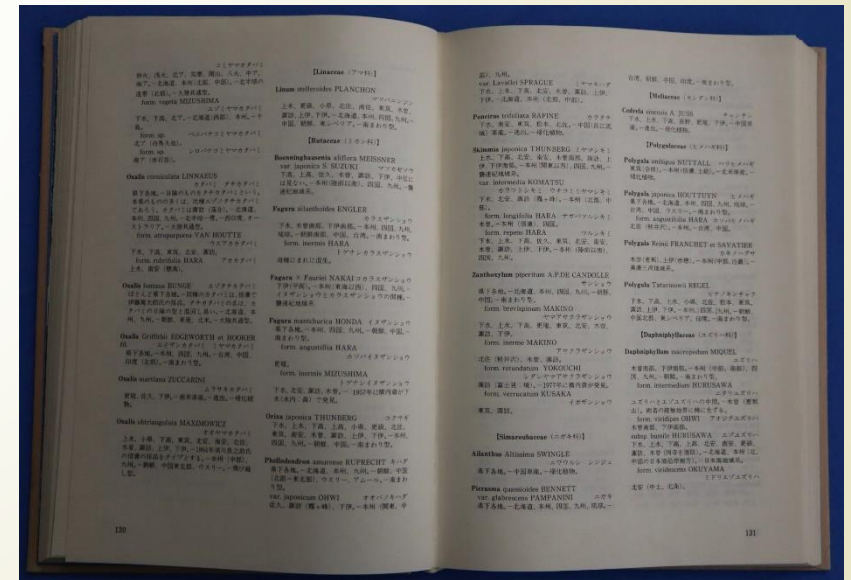
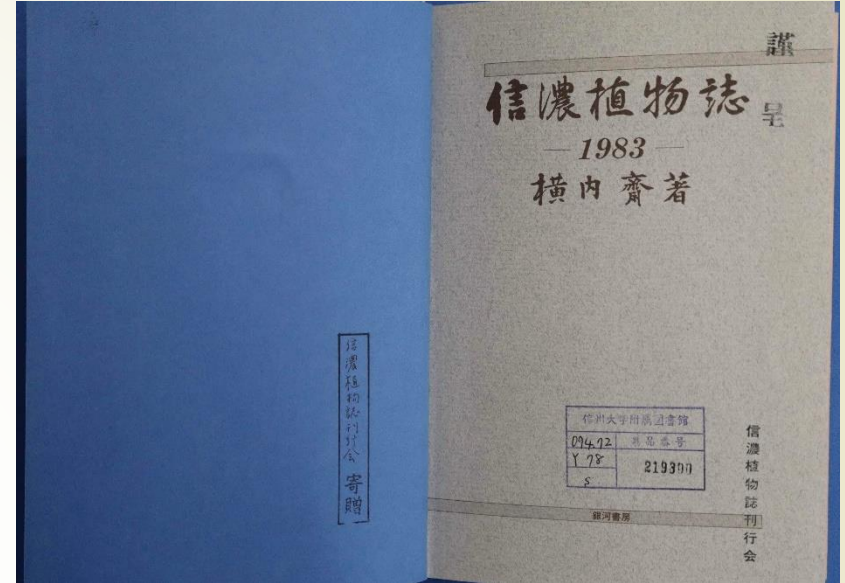
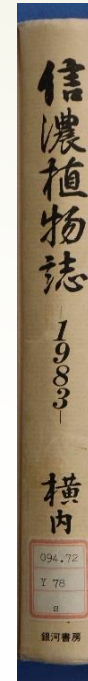
こうした学問的発展は、大正期にはじまる名勝・天然記念物の調査報告にも結実しています。

おわりに

# 『信濃植物誌-1983-』

横内齋著  
1983(昭和58)年  
銀河書房

著書の横内齋は、青年時代に矢澤米三郎・河野齡蔵の指導を受け、その後長野県内の植物を70年間にわたり調査、新種の発見や県内産地の確認などで成果を上げた。本書は残された4,000枚の原稿をもとに、没後子息の手で出版されたもの。元になった標本約25,000点は信州大学に寄贈され、現在自然科学館が所蔵している。



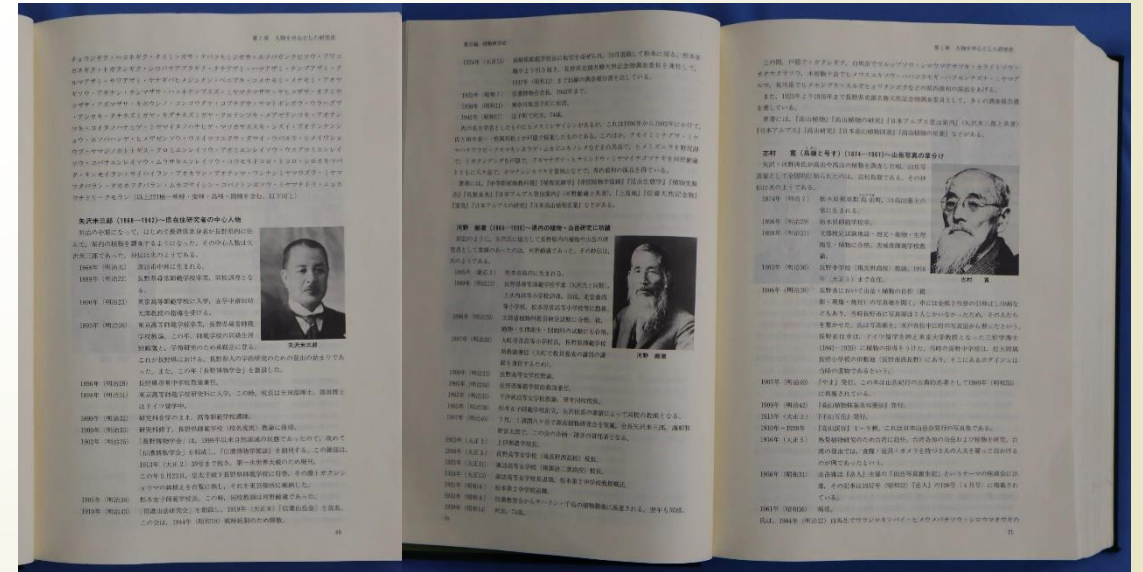
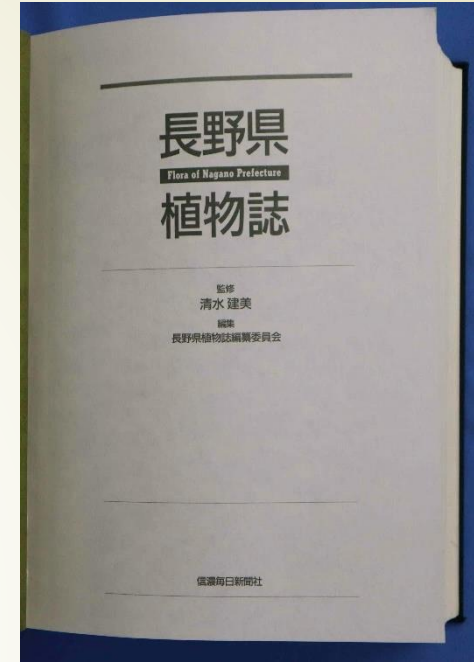
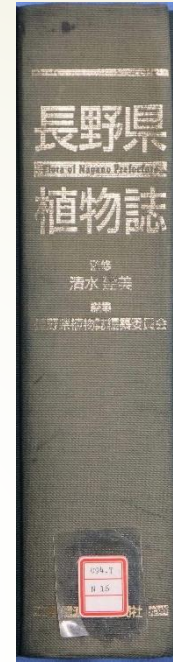


おわりに

# 『長野県植物誌』

清水建美監修，長野県植物誌編纂委員会編  
1997(平成9)年  
信濃毎日新聞社

1978(昭和53)年から編纂を開始し  
1997(平成9)年に完成した1700頁を  
超える植物誌。長野県内で確認できた植物  
のデータ40万件を収める。



# 現代へ、そして未来へ引き継ぐもの —信州大学ミュージアムへ—

ライチョウや高山植物などの生物標本と矢澤米三郎をテーマに取り上げた今回の企画展。100年前の貴重なライチョウ標本が本学の自然科学館にあることを知り、それがどのような経緯で伝えられるに至ったのか、その調査から作業は始まりました。

1936(昭和11)年に長野県松本女子師範学校が作成した『郷土研究資料目録』がその大切な手掛かりとなり、自然科学館に伝来したライチョウ標本に関しては、矢澤米三郎が採集した標本そのものであることが理解されるに至ったのです。

自然資料標本とその伝来を物語る人文資料の両者が相まって標本の学問的価値を高めたと言えます。特に、地球環境における気候変動を考えるうえで高山生態系はとても脆弱であるとともに鋭敏なセンサーでもあります。その意味で、100年以上前の動植物標本を活用した他に類のない文理融合型研究は、重要な位置にあります。

過去の高山生態系を理解し、そして過去から現在までの変遷を理解することは、将来予測や保全策の検討においてもとても重要なことです。そして、標本等の試料・資料は過去を知るための唯一の手段なのです。

ここに異分野の協力を基礎に研究することができる大学ミュージアムの存在意義があり、研究基盤としての信州大学ミュージアムを展望します。

おわりに

# 『長野県版レッドリスト 植物編』

長野県環境自然保護課・長野県環境保全  
研究所編著  
2014(平成26)年

絶滅のおそれのある長野県の野生生物の  
うち、植物についてリスト化したもの。  
2002(平成14)年~2005(平成17)年  
に発行されたレッドデータブックを改訂した  
もの。



おわりに

# 『長野県版レッドリスト 動物編』

長野県環境自然保護課・長野県環境保全  
研究所編著  
2015(平成27)年

絶滅のおそれのある長野県の野生生物の  
うち、動物についてリスト化したもの。  
2002(平成14)年~2005(平成17)年  
に発行されたレッドデータブックを改訂した  
もの。



## 展示関連図書（中央図書館蔵）

- ・『昆虫生態學』 矢澤米三郎, 澤田[カズ]義合著 光風館 1903
- ・『野外植物之研究([正]・續)』 博物學研究會編；牧野富太郎校訂 參文舎 1907
- ・『日本アルプス登山案内. 8版』 矢澤米三郎, 河野齡藏共著 岩波書店 1923
- ・『日本北アルプス登山案内』 鐵道省 鐵道省 1924
- ・『上高地』 矢澤米三郎著 岩波書店 1928
- ・『史蹟名勝天然記念物調査報告書(第1-14輯)』 長野縣編 長野縣 1933
- ・『高山植物の培養』 河野齡藏著 朋文堂 1934
- ・『植物記([正]・續)』 牧野富太郎著 櫻井書店 1946
- ・『雷鳥の生活』 大町山岳博物館編 第一法規出版 1964
- ・『長野県の植物』 横内斎著 信濃教育会出版部 1971
- ・『立山の雷鳥』 富山県教育委員会 富山県教育委員会 1972
- ・『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告(第1巻 - 第7巻)』  
長野県文化財保護協会 長野県文化財保護協会 1974-1975
- ・『鳥の世界・野鳥随筆・雷鳥・森のひびき』  
黒田長久著・山県深雪著・矢澤米三郎著・中村登流著 講談社 1986
- ・『雷鳥が語りかけるもの』 中村浩志著 山と溪谷社 2006
- ・『雷鳥: Messenger from god, who wearing scenery』 高橋広平著 藤原印刷 2017



# 信州大学 大学史資料センターについて

大学史資料センターでは、信州大学の歴史を将来に伝えていくために本学に関する資料を収集しています。皆様がお持ちの資料をぜひご提供ください。

●資料提供の手続きにつきましては、[大学史資料センターのウェブサイト](#)をご覧ください。

ご提供  
いただいた  
資料の一部



大学祭パンフレット



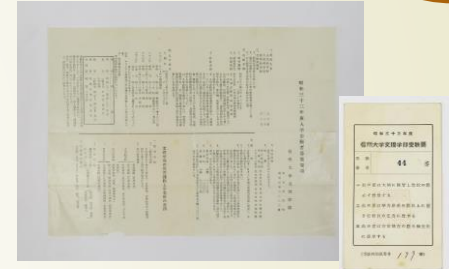
講義ノート



教科書



スナップ写真



募集要項・受験票



バックル・徽章



卒業証書



課題レポート



演劇ポスター



アルバム

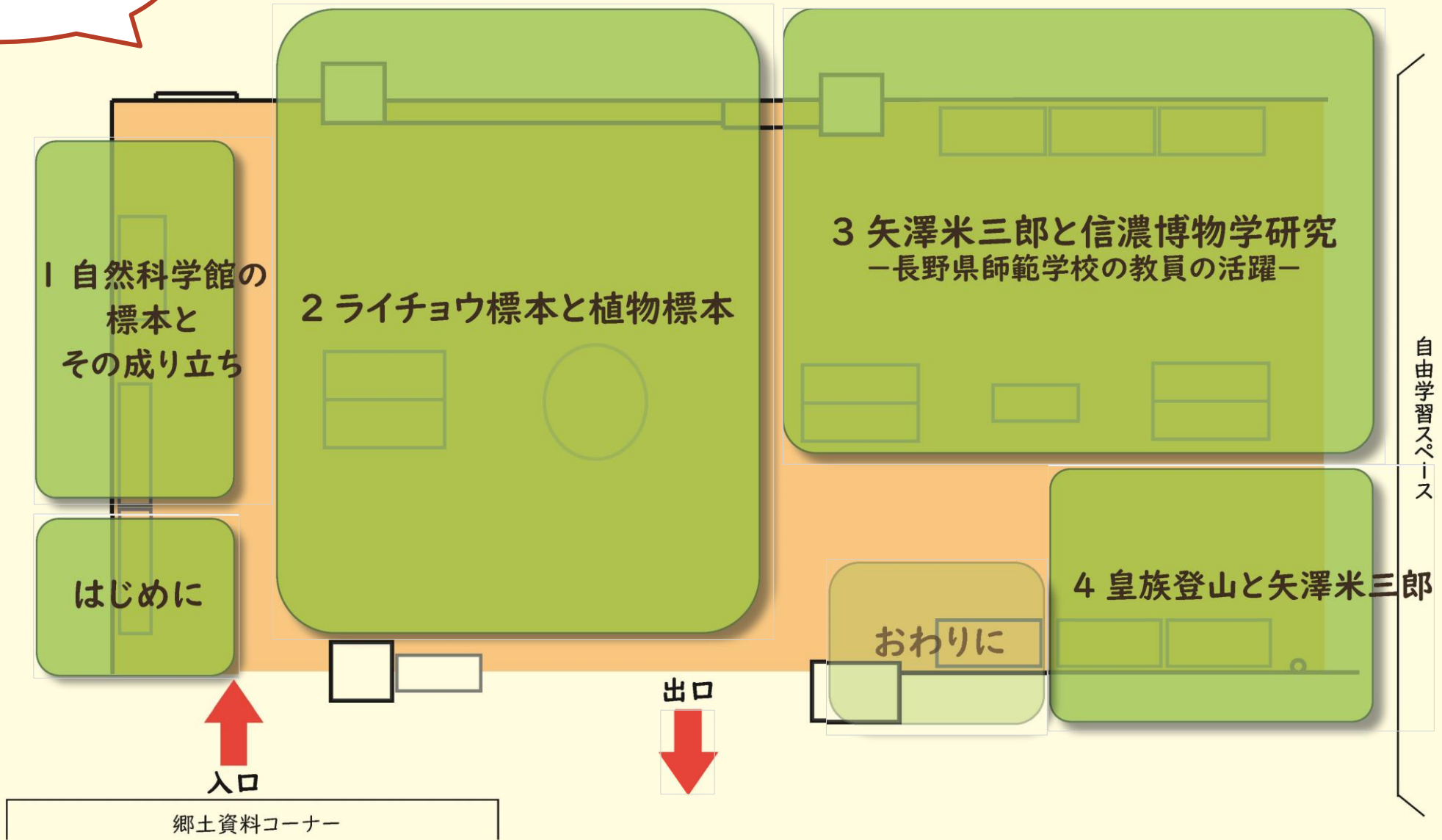


学生新聞

2023年3月末時点で6000点を超える資料をご寄贈いただきました。  
ご提供いただきました方々に、厚く御礼を申し上げます。

# 中央図書館 1階 展示コーナー 案内図

見たい展示エリアを  
クリックしてください



# 明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校 —矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に—

信州大学  
大学史資料センター

スライド 制作・編集 田中 圭美

制作 信州大学 大学史資料センター  
展示協力 信州大学 自然科学館  
信州大学附属図書館  
諏訪市博物館